語り継ぐ思い
～戦没者遺族として～

一般財団法人　静岡県遺族会

発刊に当たり

「戦没者の家族としての体験、思いを次世代に」

先の大戦後 75 年以上が経過し、戦争を知らない世代が国民の８割を占める今日において、戦争の記憶は風化の一途をたどっております。

戦中・戦後の労苦を身をもって体験した遺族は、世界の恒久平和のために、戦争の悲惨さ、平和の尊さを戦後世代に語り継いでいかなければなりません。

戦没者の家族として体験し、また、母親等から伝え聞いた苦労や戦争の悲惨さ、平和への思いを各市町遺族会会員の皆様からお寄せいただき、冊子に取りまとめました。

語り部活動やつつじ会（青年部）研修会等、様々な場で活用され、次世代に語り継いでいっていただければ幸いです。

令和４年２月　静岡県遺族会会長　杉　山　英　夫

祝　　辞

静　岡　県　知　事　　川　勝　平　太

このたび、一般財団法人静岡県遺族会から「語り継ぐ思い～戦没者遺族として～」が発刊されますことをお慶び申し上げます。

戦争を経験した世代の高齢化が進み、戦争を知らない世代が国民の８割を占めるようになった今、戦争の記憶の風化が危惧されております。

本書には、戦中・戦後の御労苦を体験された方々の、想像を絶する過酷な戦争体験や、亡くなられた御家族への思いと癒えることのない深い悲しみ、恒久平和への願いが綴られています。寄稿いただいた会員の皆様に心から感謝しますとともに、編集委員の皆様の御尽力に敬意を表します。本書が、戦争の悲惨さと平和の尊さを次の世代へと語り継ぐ貴重な資料として活用されることを切に願います。

県では、今後も春季・秋季の静岡県戦没者追悼式、沖縄「静岡の塔」追悼式を開催し、御遺族の思いを胸に、戦没者の慰霊に取り組んでまいります。皆様におかれましても、引き続き御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、貴会の活動のますますの充実と、会員の皆様の御健勝、御多幸を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

目　　次

戦　争　と　平　和	沼津市遺族会	宮島きぬえ	1
戦争中の住まい…石川県七尾市石崎町東三区	三島市遺族会	田中芳夫	4
戦　　争　　体　　験	富士市遺族会	関口純一	5
母　　を　　想　　う	富士市遺族会	池田恵子	6
涙・涙の慰霊巡拝…父の眠るフィリピンへ	御殿場市遺族会	小宮山弘子	7
父の眠る小笠原の海へ…静岡県遺族会慰霊巡拝に参加	御殿場市遺族会	芹澤哲之	7
母の戦争のはじまり　早く楽させたいとの一念	御殿場市遺族会	勝又正敏	8
70 周年記念事業の成果に大きな感動を覚える	御殿場市遺族会	高村政幸	9
２ヵ月で二人の子供が戦死	御殿場市遺族会	勝間田敏博	9
祖父母の気持ちになると辛い			
父の慰霊祭モンゴルで　私の人生に一区切り	御殿場市遺族会	湯山豊彦	10
私の戦争体験記　シベリア捕虜生活	御殿場市遺族会	岩瀬春雄	11
「遺族会を引き継いで」私たち・若夫婦・孫へと続く	御殿場市遺族会	杉山しず子	12
小学二年の夏…機銃掃射の怖い体験あり	御殿場市遺族会	妹尾輝満	13
苦難に立ち向かった親祖先に感謝	御殿場市遺族会	横山俊英	14
戦争の惨禍の継承を思う	伊豆の国市遺族会	村越興次	15
私の終戦と戦後について	伊豆の国市遺族会	水口一弘	16
あの戦争は何のためか	伊豆の国市遺族会	滝口久富	16
大連から引き揚げ	函南町遺族会	太田輝彦	17
戦争末期の体験	函南町遺族会	柳本兌夫	18
母　の　戦　争	長泉町遺族会	芹澤和子	19
あれから 50 年	静岡市静岡遺族会	丸山千代子	20
報　恩　感　謝	静岡市静岡遺族会	斉藤守代	20
短　歌　「　波のはたて　」「　惑星　」	静岡市静岡遺族会	為貝たか	22
涙　　雨	静岡市静岡遺族会	黒瀬良夫	24
父よ母よ戦争のない時代に生まれかわって	静岡市静岡遺族会	中山淳次	25
母の「三回忌」を前に	静岡市静岡遺族会	西澤宣二	26
周りの皆に助けられて	静岡市静岡遺族会	渡辺タキ	28
私のサイパン　戦死した父の面影を追って	静岡市清水遺族会	深津芙美子	29

私と太平洋戦争	焼津市遺族会	永田實治	32
出征兵士　「住吉の浜」にて送る	吉田町遺族会	松浦太一朗	34
私の戦争体験記　あの日あの時	川根本町遺族会	榎田　肇	35
平和の尊さを後世に伝える　慰霊巡拝に参加して	浜松市遺族会	大石紘司	36
比島戦跡巡拝団に参加して	浜松市遺族会	小倉てい	37
台　湾　慰　霊　行	浜松市遺族会	井村俊一	38
戦跡巡拝　サイパン、テニヤン方面の慰霊巡拝の旅	浜松市遺族会	袴田きよ	38
歌集「ルソンの小石」より	浜松市遺族会	栩木淑子	39
わが町の慰霊祭	浜松市遺族会	友田　宏	39
戦中戦後の労苦　夫亡き後、 子供の寝顔に　負けられない！	浜松市遺族会	館つる	41
父との思い出とフィリピン慰霊巡拝の旅	浜松市遺族会	川合康彦	42
出征前夜日章旗を母に託す 父との思い出と戦没地への慰霊に参加して	浜松市遺族会	鈴木利協	43
父の望みを守った母	浜松市遺族会	富田健太朗	44
母に感謝、戦後の生活は… お寺の奥様の一言が幸の路となる・・・	浜松市遺族会	伊藤信吾	45
遺品（手帳）より　俳句で亡き母の叫び聞き 「遺影言わず　わめきたくなる　秋の暮」	浜松市遺族会	高橋俊子	45
父の出征見送り「いい娘になれよ」と言い残す 戦後の母の労苦に感謝	浜松市遺族会	新村はる枝	46
戦後を生き抜いて　母と子の労苦と親子の絆	浜松市遺族会	吉田よしゑ	47
戦死した叔父（幸吉）の生きた証 作文「昨夜の雨」より	浜松市遺族会	高林幸和	48
モンゴルへの遺骨収集派遣に参加して 「その靴の中にご遺骨・足の指の骨５個…発見」	浜松市遺族会	竹内　治	49
戦後 26 年ぶり無言の帰郷（遺骨我が家へ帰る） 父との約束を果たすため戦中戦後、 激動の中を生き抜いた母の労苦	浜松市遺族会	大石　功	50
次世代に語り継ぎたい遺族の体験	浜北区遺族会	岩崎伸次	52
戦没者の家族としての体験と思い	掛川市遺族会	名倉武雄	53
「負けてたまるか」は、母の口癖	森町遺族会	太田和子	54
私の比島慰霊巡拝について	森町遺族会	松尾　要	55

戦　争　と　平　和

沼津市遺族会　宮島きぬえ

結婚から65年…勤労動員、結婚、夫の出征、子供の誕生、空襲、敗戦、焼け跡からの戦後復興、夫の戦死公報…夫の戦死の公報に涙を流すこともはばかられ、その後の亡き夫の両親と子供とのバラックでの耐乏生活。思えば、自分でもよく乗り越えて来たと思う苦労の連続の長い長い歳月。神のご加護で、88歳の米寿近くまで生かされたことの有難さに感謝しつつも、時に、波乱に富んだ越し方が、まるで昨日のように蘇る。

戦争が拡大しつつある昭和18年、東京の市ヶ谷駅のすぐ近くに住んでいた宮島の所へ嫁ぎ、夫は国民服、私はモンペ上下での質素な結婚式を挙げた。当時、宮島は中支（中国の華中）から復員してきたばかりで、昼は仕事、夜は皇居の警備に忙しく、22歳になったばかりの私は勤労奉仕の毎日で、毎日の空襲警報に家の縁の下に防空壕を掘り、夜、寝るときはモンペ姿の毎晩だった。春も半ば過ぎの桜満開の頃、突然主人に来た召集令状…。覚悟はしていたものの3ケ月の身重、呆然としていた私に「せめて子供の顔を見てから出征したい。」元気のない夫の声に私は返す言葉もなく（お国のために頑張って働いてください。でも、必ず無事に帰って来てください。両親と子供が待っています。）と心の中で叫んだ。出征に際し、夫が私に渡してくれた頭髪と爪、私も髪の毛を切り、リボンを渡しながら握り合った手と手…。だが、これが最後の別れになろうとは夢にも思わなかった。

その後、手紙も来ないので心配していたら、「軍用列車からペンに紙を巻いて投げた兵隊さんがいる。」と届けてくれたその手紙に、「宮島國雄、ただいま出発します。」と走り書きがあった。

一週間後、門司港の旅館より内地へ帰る人に頼んだという手紙が届いた。「長い別れになるが、お前がいるから安心して戦地へ行かれる。自分は幸福者だ。短い間だったが、自分によく尽くしてくれて有難う。自分はもう生きては帰らない。勝つまでは戦って戦って身の滅ぶまで…。子供のことは頼む。男の子は強く、女の子は優しく、自分の分までお願いします。出征する時まで随分わがままを言った。今、悪かったと思う。出発の時、元気がなかったけど、これからの銃後の妻は気持ちを強く持ち、生きていってくれ。また、子供には中等教育を受けさせてくれ。両親のこと、くれぐれも頼む。時計も止まってしまったので一緒に送る。返事をくれるなら、至急速達で旅館まで送ってくれ。自分のことは心配しないでくれ。　　昭和19年8月3日　3時」

内地の生活はますます苦しくなり、特に食糧事情は緊迫し、水のような雑炊の日が続き、お隣の奥さんが窓越しにさつまいもを二切れくださった時のうれ

しさと、あの美味しかった味は、65 年たった今でも忘れることはできない。
昭和 19 年、大東亜戦争も日に日に激しさを増し、東京の空を銀翼をつらねた敵機襲来。不気味なサイレンと空襲警報の発令。夜は真っ赤に染まった四方の空を震えながら見つめる毎日だった。
昭和 19 年 11 月 13 日、病院で男児誕生、赤子の大きな泣き声に両親は大喜び。その時、夫がいてくれたらどんなに喜んだろうと真っ先にそのことを思った。翌日、またしても空襲警報に、湯たんぽとおしめを抱え、赤ちゃんをしっかりと抱きかかえ地下室へ避難し、それからは、連日の空襲に怯えながら母乳も出なくなり、赤ちゃんのためにもと、思い切って舅の実家の長野県飯田市へ疎開することになった。ちょうどその頃、戦地から夫の航空便が届いた。
「長らくご無沙汰しました。ご両親様、子供、おまえも変わりありませんか。自分も相変わらず軍務いたしております故、ご安心ください。毎日うだる暑さをもろともせず、半裸になり、昼と言わず夜と言わず、血の出るような苦労を一人一人が味わっている。新聞、ラジオで聞いたと思うが、陸海軍の荒鷲が、帰りのガソリンも積まないで、一機一艦、この意気、死生を超越し尽忠報国の精神を目の前に見た。何と言ってよいか書き表せない。日本ならこそ実に有難いと思います。お前も母親として、温かい心、誠心をもって自分の分までお願いします。手紙も思うように書けません。子供の生まれた日、男か女か、名前など知らせてください。
比島派遣一八四五部隊林隊　宮島國雄（検閲印）」
早速、航空便にて、男の子が生まれ伸明と命名したことを伝えたが、見たかどうかはわからずじまい。半月後、両親も家を焼かれ、着の身着のままで私達のところへ疎開して来た。お互い無事を喜び、手を取り合って喜び合った。それから信州市田村の役場の屋根裏に四人で住み始めた。ところが、食糧難はどこも同じで、さつまいもやかぼちゃの代用食で手足は黄色くなり、皮膚病に悩まされる毎日だった。伸明が一歳のお誕生日の頃、頭に牛乳をかぶり、火傷をした。油一升を持って医者に行き、薬を作ってもらい何とか生命を助けてもらったが、その間中、夫の手紙を読んでどんなに励まされたことか。
8 月 15 日、日本は敗戦・終戦の日を迎えたが、今日は帰るか、明日は帰るかと待ちわびた夫は復員して来ず、来たのは戦死の公報…。「昭和 20 年 3 月 15 日、マニラ、ルソン島に於いて戦死」私は只、呆然として涙も出なく、これから先どうして生きていこうか、夢も希望もなくなり、無心に遊ぶ我が子の姿に胸が一杯になった。ちょうどその頃、実家の兄もコレヒドール島で戦死。母の悲しみはひとしおで、気も狂わんばかりだった。夫も兄も戦死、頼る人とてなく、将来の見えない不安に胸がつぶれそうだった。飯田市へ遺骨を取りに行っ

た日、天竜川とアルプス連山の赤く染まった夕日が印象的で、今でも脳裏に焼き付いている。家に帰り白木の箱を開くと、「宮島國雄 27 歳」としか書かれていない紙が一枚淋しそうに入っていた。私は、夫が征く前に遺していった遺髪と爪を墓地に納めた。

昭和 25 年春、市田村の人々と名残を惜しみ、故郷の清水市に帰ってきた。家も焼夷弾や艦砲射撃にあい、バラック建てに住んでいたが、とにかく生命あることの無事を父母と喜び合い、ドラム缶のお風呂に入り、心尽くしのうどんを食べた。新しい生活の出発である。

その後、土地を借りて家を建て、母もいろいろと商売し、私も清水市役所に勤め、伸明の成長を楽しみに夫の遺書を見て励ましあった。伸明も高校大学と進学し、やがて就職して沼津に転居してきた。結婚もし、孫も生まれて私も初めて生き甲斐を感じるようになった。

舅は昭和 27 年、病気で 57 歳で他界。姑も九年間床につき、昭和 58 年、85 五歳の長寿を全うしたが、一人息子の戦死後、長い間共に働き、悲しみを分かち合ってここまで来られたのは、姑のお陰と感謝している。

昭和 56 年 9 月 1 日、私も 33 年勤めた市役所を定年退職し、主人との短い縁ではあったが、主人のお陰で今は息子夫婦と三人の孫にも囲まれ、戦中・戦後、想像もしなかった平和の中で幸せな生活を送っている。

平成 7 年 8 月、夫の戦死地マニラへ一度行ってみたいと思ったが、治安が良くないのでインドネシアバリ島に息子に連れて行ってもらった。南洋の青い海岸、きらきらと照り付ける太陽、岸壁にたたずみ、私は戒名と花束を海に投げ入れ、それが行きつ戻りつしていたが、やがて沖へ沖へと流れて行った。やがてマニラ湾へ続くことを祈りつつ…。

戦後 65 年、すべての事が昨日のように思い出される。苦しかった歳月。1 年にも満たない夫との新婚生活、父を知らない子を必死に育てた歳月、すべては夢と思えるようになってしまった。

「戦争」の二文字に運命を翻弄された私達、戦争で亡くなった 250 万人、空襲で生命を絶ちきられた 50 万の人達、軍人たちの尊い犠牲の上にもたらされた今の豊かな平和、戦争・空襲で亡くなったのは、私達の親・兄弟・夫・子供であると思う時、二度と私達のような辛い体験をする人がないように、平和な世の中を切に祈っている毎日である。

（平成 23 年沼津市遺族会発行「戦争と平和」より）

戦争中の住まい…石川県七尾市石崎町東三区　　三島市遺族会　田中芳夫

一　戦争中の避難

住む家の前に防空壕を掘ったこと。祖父と伯父が協力して完成させた。避難に間に合うときはお寺の近くにある防空壕や各所の防空壕など町の人が身を隠す場所まで避難した。

戦争中、空襲警報、B29 爆撃機が飛来する爆音で一斉に防空壕に避難、弟は母に、私は叔母に背負われて避難したのを覚えている。

米軍のB29 爆撃機が飛来し、バー、バー、グォー、グォーと音を立てて通過するのを見守っていたのが子供心に今も記憶によみがえる。

一　戦地に行く前の遺書と本人の爪や髪の毛等について

父は戦地に行く前に［爪と髪の毛］、それに［遺書］を自宅に残していった。

戦後祖母の指示で墓地に納めた。

一　伯母の慰問、祖父の慰問

○　伯母が父の兵舎に慰問に行った際

差し入れしたが、差し入れ物をおおやけに食べれない状態だったようで、非常に悔やんでいた。

○　祖父が叔父の慰問に行った際

兵舎に入営している時、叔父の好物を差し入れに行った際、叔父がその物をトイレに持って行き、トイレで食べたと終戦後何回となく聞かされた。

一　食糧不足の補給のため街では各所を耕し農地の拡大を図る。

国鉄に父が勤務していた関係で、近くの線路脇を借りて畑として利用した。

また祖父母は山を切り開き 500 坪を畑にしていて、100 坪ぐらいずつ兄弟に貸して耕作していた。

一　戦後間もなくの頃、七尾湾口に戦争中米軍が設置した魚雷に漁船が触れて沈没

燃料の油と一緒に獲った魚も流され、回収した魚を安く販売したのを行商していた祖母が購入し食べたことがある。魚は油臭い味がした。

魚を安く販売・・・油臭くなった魚を洗い食べた。

祖父の話では、戦争中船が七尾湾に退避し、船の看板に木の葉をカモフラージュして避難してきたのをよく見かけたようです。

一　遺族年金の件

○　私の件

私が小学校二年生のとき母が再婚したので遺族年金がもらえず、やむなく祖父母の家に引き取られて生活することとなった。

○　従妹の主人の高橋忠征さんも同じ境遇でした。

このように遺族年金が停止した方も多かったと思われる。

一　特別弔慰金の件・・・名前は高橋忠征さん（新潟県出身）

本人は特別弔慰金があることさえ知らずに戦後を送ってきた。私が遺族者であることを知り、本人が五年前に初めて申請して受給した。その後、本人が病死したので一回しか受けられなかった。非常に残念だった。何らかの形で戸籍をたどり知らせる方法があればと思う。

一　小学校校庭に食糧不足で一面をさつま芋畑とし使用していた。

生徒が行き来する幅を残し他はすべて芋畑だった。

一　小学生に衛生状態の悪化と栄養不足から皮膚病がまん延していた。

特に頭上がおできだらけとなり（現在のアトピー性皮膚炎の様）なかなか治らなかった。皆、金銭面で貧しくて、衛生面は銭湯に時々しか行けない状態だった。

一　報恩講の開催

街の青年会では毎年報恩講を開催し、町内の方が持ち回りで民家に集まりお参りをしてくれていて、現在も続いています。このとき、町内の戦死者の遺影を集めて飾り、慰霊の供養をしてくれている。

一　街の戦没者慰霊碑

お寺の境内には戦没者慰霊碑が立っている。

戦後何年か経過し、戦争に召集されたが戦地で行方知らずになり、その後戦死が判明した方が 20 数名、慰霊碑に追加し刻まれた方がある。

戦　争　体　験

富士市遺族会　関口純一

昭和 11 年生まれの私は［終戦を告げる玉音放送］を小学三年生の 8 月 15 日に、疎開先の山梨県笹子村（母の実家）で聴き、大声で泣いた事を今でも覚えています。今日は、東京で生まれ育った私の小学校一、二年生時の学校生活をつづってみます。

昭和 18 年 4 月、東京都王子区立王子第 4 小学校に入学、学校は［木造 2 階建ての校舎］と［全面がアスファルトで舗装され地面が全く無い運動場］が、高いコンクリートの塀に囲まれていました。正門と裏門には鉄製の高い門扉があり、7 時 30 分～8 時の登校時と午後の下校時間帯だけ開扉されました。

生徒は登校すると門の前で上履きに履き替え手提げに入れて運動場や昇降口を通って教室に入りました。

昭和 19 年になると戦争が激しさを増し、五、六年生は学童疎開、三、四年生は縁故疎開、一、二年生は未だ幼く可哀想なので親元に残されたのですが、多数の子は親の考えで縁故疎開をしたので生徒数はわずかになりました。夏休みが終わり登校してびっくり仰天！学校中の机や椅子で運動場に大きな基地が築かれ、国防軍人が訓練をしていたのです。また、一階教室は床板が 2 平方メートル程切り取られ、はしごを下りると地面を深く掘った防空壕でした。空襲警報発令！急いで入ると真っ暗で何も見えず、べたべたの泥土が体中に付着し気持ち悪かったです。

昭和 20 年 2 月には私と年配女教師の二人だけになり、仕方なく 2 月 28 日冒頭の所へ疎開した訳ですが、3 月 10 日夜の大空襲で家も東京全土も焼け野原になった事を思えば命拾いをしたものです。

母　を　想　う　　富士市遺族会　池田恵子

母と永遠（とわ）の別れをしてから早 10 年の歳月が流れた。

私が物心ついた頃には、父はもう亡く、母と生後 2 ケ月足らずの妹と 3 人で母の里の狭い「離れ」で細々と暮らしていた。母は実家の農業を手伝い食物は何とか調達できていたらしい。

私が小学校に上がって間もなく父の実家に移り、母は仕事探しを始めたが、終戦後間もない時で保育所も幼稚園も無く、まだ手が掛かる子持ちの女性の就職口はなかなか見つからず途方に暮れたと言う。

母はそんな苦労話を滅多にしなかったが、大人になった私の幼いころのかすかな記憶の中に母が朝早く私と妹を寝床に残して出かけることが度々あった。どこへ何の為に行ったのか尋ねると、職探しが行き詰まり、熱海の旅館へお米を売りに行ったと言うのです。朝 4 時起きして 10kg 以上の米を背負い家から国鉄の駅まで約一里（4km）の長い田舎道を歩き、駅から汽車で熱海に着くとそこから又徒歩で旅館街へ向かい行商したそうです。車でどこへも楽に行ける生活に慣れていた私には、なかなか信じられなかったのですが、そこまで骨身を削り私達を育ててくれた証（あかし）とも云える母の話には驚き、胸が熱くなりました。けれども、当時は米の自由販売は禁止だと知り、体力的にもきつく長続きしなかったようです。

敗戦後日本は、25 年程経ってやっと経済が上向き、やがて世界から注目され

る経済大国に発展し人の暮らしも便利で豊かになっていきました。私が初めて自分の車を買えた時、母と 2 人で土地付きの住宅を入手した時、「夢のようだね」と共に喜び合いました。

母の 95 年の人生は、自分の 2 人の子供の為にあり、それ故に強くたくましく生き抜くことが出来たと母はよく言って居りました。そんな母の愛に守られ支えられた私の人生は、いつも安心で幸せでした。亡くなって 10 年経った今も、母への熱い想いは尽きることはありません。

涙・涙の慰霊巡拝…父の眠るフィリピンへ

御殿場市遺族会　小宮山弘子

静岡県遺族会海外戦跡地慰霊巡拝に初めて参加。静岡県内の戦没関係者の中で、ルソン島リザール州タバル地区へ、この地で父を亡くしたのは私一人でした。

慰霊祭は、ホテルからバスで 2 時間位の山奥の小さな村で実施されました。

「弘子は大きくなった事でせう。」昭和 19 年 8 月 15 日、3 度目の出征をした父からの手紙には、必ずこの一言がつづられています。

古希を迎える私をずーと見守ってくれたことへの感謝と今の幸せを報告し、2 年前に父の元へ旅立った母と今度こそ幸せにと祈りつつその場を後にし、その後いたる所で慰霊祭が行われました。

昭和 19 年 10 月 31 日の父からの手紙は台湾の高雄市、その後の手紙は比島とあり、この頃の戦いを想像しただけでも胸が熱くなる思いですが、現地ガイドのヒデ子さんの詳しい説明も加わって、その悲惨な状況が鮮明になり涙、涙の慰霊の旅でした。

20 年前、母が 3 度目の慰霊巡拝を「他の国にしたら」といった私に「フィリピンが一番いいんだよ」と、この地に立って、この言葉の意味が、心からわかったような気がします。　（会報ごてんば 2014 年 1 月号より）

父の眠る小笠原の海へ…静岡県遺族会慰霊巡拝に参加

御殿場市遺族会　芹澤哲之

午前 10 時東京竹芝桟橋を出港、25 時間 30 分の船旅でした。

おがさわら丸は 6,700 トンでしたが、外洋に出て時化てきたら寝ているマットごと横壁に寄せられることもあり、親父達が乗っていた 103 号輸送艦は 890 トン、そんな小さい船ではどんなに揺れただろうか…。

父島、母島の戦跡は、保存状態が思っていたより良く、ジャングルの中に高射砲陣地跡（大砲が錆びて残っている）、海運通信隊本部壕（岩山を手掘りで車の通れる大きさにしてあり）、沈船、墜落機、トーチカ、一人がやっと入れるタコツボ、各隊間連絡通路、塹壕等々多く見られました。現在の若者達（10代～30代）に見せてあげ、戦争の悲惨さ、虚しさを知って欲しいと感じました。

父島での慰霊祭は、海上自衛隊基地内にある海軍基地跡で、母島は翌日海軍司令部施設跡で行われ、散華された方々を偲びました。

小笠原諸島での戦いはなかった様ですが、諸島周辺海域から硫黄島にかけての海域では数多くの艦が、飛行機または潜水艦の攻撃を受け没しています。

私の戦跡慰霊参加は（硫黄島）（戦没者遺児による慰霊友好事業20周年記念洋上慰霊12日間）、そして、今回の（静岡県遺族会小笠原諸島慰霊巡拝）と3度参加させていただきましたが、毎回自分自身に「戦争遺児をつくっても、つくらせてもいけない」と念じますが、昨今世界各地で戦いが起こっている事が残念でなりません。親父達が熱い思いを抱いて戦い、散華された事を決して無駄にしない様、日々を過ごしたいと心掛けていますが、思うようにいきません。反省合掌。　（会報ごてんば2014年8月号より）

母の戦争のはじまり　早く楽させたいとの一念

御殿場市遺族会　勝又正敏

私は昭和18年2月、静岡市紺屋町で生まれた。父は営外居住を許され、連隊に通っていた。

昭和19年5月父がサイパンへ出征し、母は私を負ぶって御殿場市中畑へ。そして母の戦争が始まった。

敵陣へ切り込んで戦死した父が、静岡護國神社へ合祀される時、母に連れられ参列。「父ちゃんが神さんになってあの上に乗っているよ」と、母は教えてくれた。それは神職さん達に担がれていた。父ちゃんが見えるかと必死に背伸びをしたことを覚えている。母と二人の生活『早く大人になって、母に楽をさせてやりたい』との一念だけだった。

父と別れ73年。数えきれない多くの皆さんに支えられ、歳を重ねて今日まで来ました。慰霊巡拝や遺骨収集で、『兵隊さん達の思いや無念さ』を感じてきました。浅学菲才の身ながら、『お世話になった恩返し』と遺族会役員を引き受けました。

戦争が、愚かでむごい、惨めなことを、そして、平和のありがたさや尊さを、

さらに、英霊に感謝し、お祀りすることは、『永遠の責務』と、子々孫々に伝えなくてはと思っています。　　（会報ごてんば 2017 年 6 月号より）

70 周年記念事業の成果に大きな感動を覚える

御殿場市遺族会　高村政幸

私の誕生日は昭和 17 年 5 月です。父親は私の 1 歳の写真を胸に戦地に立ちました。

物心ついた頃でも父親の存在すら考える事もなく、幼少期を過ごし、小学校入学、中学、高校を無理なく通わせていただき、就職して間もなく結婚いたしました。私の人生で初めて女房の父親（親爺）を「お父さん」と呼ぶ人ができました。

親爺の顔も知らない自分は、戦争遺児である事を頭の中で、心の中で実感いたしました。自分が今ここに居るのも、親爺が残してくれた一粒種であると同時に、生活と成長ができたのは、母親の一生懸命の努力と親族と親戚の皆様のお陰だと思っています。

現在の遺族会の状況は、会員の高齢化が進み、戦争経験のない人達が多くなり、英霊への敬愛思想が薄れ、忘れがちの世代に進んでいます。

この度「新つつじ会館の建設の奉賛金募集」に係わる機会を得て、大きな感動を覚えました。募集の結果は予想をはるかに超えた結果に、心から関係者の皆様に感謝、私達は今後も戦争の悲惨さを、後世まで訴え続ける事が使命だと思います。英霊諸侯は望郷に思いを馳せ、愛しい家族との再会もかなわず、国の犠牲となりました。この無念さはいかばかりかと、会員皆様の無念さも同じである事を深く感じ得ました。　　（会報ごてんば 2017 年 6 月号より）

２カ月で二人の子供が戦死　祖父母の気持ちとなると辛い

御殿場市遺族会　勝間田敏博

私の家での戦没者は二柱で、私の父の兄弟で叔父にあたります。上の兄は中華民国山西省大谷で、昭和 19 年 9 月 20 歳で戦死でした。

今回は、下の弟を取り上げたいと思っています。弟は海軍で空母（信濃）72,000 トンの乗務員でした。横須賀から処女航海で護衛駆逐艦（雪国、浜国、瀬国）に守られながら、呉軍港に向かって航行中、敵の放った魚雷 4 発が命中、艦上には（将兵、工員、軍属）約 2,516 名が乗船されていたとされ、約 1,080 名は救助されたが、残り約 1,435 名は、船と共に海底 4,000m に沈んだ。世界

最大の航空母艦「信濃」は 1944 年 11 月 29 日（水）処女航海において 17 時間で沈んだ。弟は 23 歳で兄と共に嫁もとらず、子孫も残さず、お国の為海に散った。

2 カ月の間に二人の子供を亡くした祖父母の気持ちを考えると辛い。戦後 72 年が経過し、戦争の体験、悲惨な過去が風化しつつある時、次の世代に語り継ぐ責任があります。その為の活動を微力ではありますが、皆様と心合わせ、力合わせの努力をしていきたいと思っています。

（会報ごてんば 2018 年 6 月号より）

父の慰霊祭モンゴルで　私の人生に一区切り

御殿場市遺族会　湯山豊彦

私は昭和 20 年 9 月 21 日の戦後生まれですが遺児です。私達家族は、父の仕事の関係で昭和 18 年から満州（現在の中国東北地区）で暮らしていました。

父は終戦間近の昭和 20 年 5 月に身重の母と姉を残して現地召集され、そのまま帰らぬ人になってしまったからです。昭和 20 年 8 月 11 日に中国モンゴル自治区で戦死したことになっていますが、実際は行方不明で部隊全滅の日を戦死日として、葬儀は昭和 33 年 7 月に行いました。

残された母は、昭和 21 年 7 月に、1 歳 8 カ月の姉を歩かせ、私を前に抱っこし、背中には重いリュックサックを背負って日本に引き揚げて来ました。母はどんなに大変であったか想像に絶するものであります。

その後、私達は母の故郷である御殿場で生活していました。女手だけで苦労して 2 人の子供を育ててくれた母は、若い時の無理がたたったためか、昭和 52 年に 59 歳の若さで亡くなりました。

私は、63 歳まで会社に勤め、退職した翌々年の平成 22 年 8 月に、日本遺族会の行事である日中友好訪問団（旧満州地区）に参加しました。遺児 21 名のそれぞれの親の戦死地を訪問する 9 日間の旅でした。父が戦死したとされる中国モンゴル自治区で慰霊祭を行なっていただき、私の人生に一区切りがつきました。

今後の遺族会はますます高齢化が進み、会員の多くは戦没者の甥・姪で次の世代になったらどうなってしまうのか心配が尽きません。将来の心配どころか現在でも仕方なく参加している人もいます。

遺族会の活動もいろいろありますが、英霊顕彰に異を唱える会員はいないと思いますので、活動の主体を英霊顕彰に絞っていったら良いと思っています。

同時に、戦死者の身内として縁があって集まっている訳ですので、会員の親睦と融和をより深める活動を願っています。

また、会員の一体化をはかるため「戦没者の遺族に対する特別弔慰金」支給対象者の見直しを期待しています。　　（会報ごてんば 2018 年 6 月号より）

私の戦争体験記　シベリア捕虜生活

御殿場市遺族会　岩瀬春雄

戦後 73 年の月日は流れ、戦争を知らない世代が増えている中、世界から注目されるほどの経済大国となりましたが、私たち日本人は、一部の政策権利者により起きた戦争に敗れ、戦争の悲惨さをいやと言うほど味わされてきました。

あの 310 万人余の犠牲者と不幸な歴史があった事を絶対繰り返してはならない、そして忘れてはならないのです。そこで、私が捕虜として味わった辛い体験を次世代に伝え残すため「シベリア捕虜生活」を記させて頂きます。

私は昭和 18 年召集され、19 年満州第 451 部隊に直接入隊、入隊後直ちに初等兵教育開始。あの気温零下 30 度という満州での厳しい教育を受け、その後、日本の小樽で積雪 2m50cm の中での、実弾射撃と突撃訓練、それも束の間、北千島柏原に入港し、幌筵島加熊別に転進、この間、満州到着から約 4 カ月でした。

実戦では、歩兵部隊では対応不可能な連日の空襲・艦砲射撃を受け、その上平地のため隠れる場所もなく死亡した戦友もいた。この状況は昭和 19 年 4 月から 20 年 8 月 15 日の終戦まで続き、終戦後はロシア軍に連れられ北シベリアへ、それから 3 年間の過酷な捕虜生活が待っていた。

捕虜とは何とも醜いものだった。食事は 300g の黒パン、スープ（中には 27 粒の豆）これが 1 食。この時から「私は絶対に生きて日本に帰るぞ」と心に誓った。食べられる物は何でも食べた。蛇、蛙、野菜の代わりに木の芽、松の実、白樺の皮を削り出る樹液を飲んだ事もある。汽車が通過した後、客が捨てたパン屑、缶詰の食べかすが落ちている。我先にと一斉に飛びつき、少し臭いし味も変わっているが、食べても不思議と腹は傷まなかった。

捕虜 1 年目の作業は、汽車が走るための薪切り、1 日の作業が終わり食堂に入ると何人かの死体が並んでいる。今日の作業で原木の下敷きになった戦友たち、無言のまま共に手を合わせる。翌朝、坊さんの経験者が簡単にお経を上げ、作業に出る前に友との別れを惜しむ、その戦友の行く先は不明で教えてもくれない。

捕虜生活 2 年目、鉄道線路工夫と土方作業、零下 35 度の寒さでの作業である。そんな辛い作業中、遠くの山々がくっきり浮かぶ、山の向こうが日本の空かもしれない、父母や兄弟姉妹達の顔が一瞬脳裏をかすめる。「会いたい」「帰りたい」と大声で泣いたこともあった。

捕虜生活 3 年目、ロシアの鉄道官舎の建築にと、のこぎり、カンナ等の鉄物を素手で持つと、零下 35 度の中では手の皮が鉄部分にくっついてしまう。こんな重労働も、ただ生き甲斐は日本にいつか帰る「タモイ」の一言に尽きる。「タモイ」とはロシア人が良く口にする（良い仕事をする者は早く家に帰れる）の意。その言葉を信じるしかなかった。冬は寒く長い、夏はすぐ終わり、寒さもひもじさにも耐えて「タモイ」、帰国の夢を見て死んでいった戦友に今更ながら、その悔しさをしみじみ感じる。

昭和 23 年 10 月 23 日、ロシアのナホトカより京都市舞鶴に生還した。「生きて帰れた」と嬉しくてただただ涙に暮れた。今にして思うと、あの苦しみは夢でなかっただろうかと錯覚さえ起こす時もある。

しかし、祖国日本のために戦い、終戦後のシベリアでの重労働の中での寒さや栄養失調で死んでいった戦友の霊は、未だあの寒いシベリアの広野をさまよっているではないだろうか…。寸時も早く遺骨収集される事を望み、心から冥福をお祈りしています。　（会報ごてんば 2018 年 11 月、2019 年 1 月号より）

「遺族会を引き継いで」私たち･若夫婦･孫へと続く

御殿場市遺族会　杉山しず子

私が物心ついた時から、我が家の奥座敷には若い男の人の写真が並んでいました。戦争で亡くなった父の 3 人の兄です。

末っ子だった父が家を継ぎました。時々父は「俺はしなすっ子だから～」と亡くなった兄たちがどんなに優秀だったのかを話すのでした。子供心に、確かにその端正な顔立ちに見とれたものです。会ったこともないのに、ずっと前から知っているような気持ちで大人になりました。

結婚し、まず『ひめゆりの塔』へ行きました。主人も一緒に「杉山　昇」の名前を探してくれ、父や従兄弟の分までお参りさせてもらいました。

年を重ね、歳をとった両親の代わりに、何回か靖國神社や護國神社への参拝に行かせてもらうようになりました。遺族会に入っていなければ、参拝するどころか、行くこともなかっただろうと思います。地域の中でも「明日は墓参だね」と当たり前のように行くようになりました。

年の経つのは早いもので、気づけば自分も高齢者の仲間入りをしていました。

娘が結婚し、孫が 2 人できました。相変わらず、あの写真は並んだままです。

若い両親は、夜、ひとしきり座敷で子供を遊ばせてから「さあー寝る時間だよ、御先祖様におやすみなさいを言おうね」と、並んだ写真を指差します。上の 4 歳の孫は「のぼる、あさえ（伯母さん)、こうちゃんと同じこう、ひろし、大じいじ…」等、よくぞ名前まで覚えたものです。そして、おやすみなさいを言って、2 階の寝室に行きます。

今、遺族会の高齢化が進み、亡くなったりもして、この遺族会そのものの存続が難しくなってきている、という話を聞きますが、この若夫婦も、この孫たちも、きっと遺族会を引き継いで、いつまでも供養し、参拝してくれるのではないかと思っています。　（会報ごてんば 2019 年 6 月号より）

小学二年の夏　機銃掃射の怖い体験あり

御殿場市遺族会　妹尾輝満

私は昭和 12 年、長崎県生まれの 83 歳で、御殿場に住むようになって 55 年になります。

私の父は昭和 12 年、日中戦争勃発と同時に召集され、老いた母と 19 歳の新妻と生まれたばかりの可愛い坊やを残し、戦地に向かう父親の心中如何ばかりかと察するに余りあるものがあります。そして昭和 14 年、23 歳の若さで中国華北地方の戦闘で戦死。途方に暮れる母、茫然自失、戦争の無慈悲さ、語る言葉さえ見当たらないのが母の心境であったろうと思います。

当初は、遺族として周囲からも温かく見守られ援助の手も差し伸べられましたが、戦争が激化するにつれ、私達親子にとって厳しい日々が続きました。母が大事にしていた着物などを風呂敷に包み、近所の農家を回り一握りの米と野菜に交換し、その日を凌ぎ、明日への命をつなぐことで精一杯でした。

昭和 20 年、小学 2 年生の夏休み、母の兄伯父さんが 5 歳の従弟を連れてやってきました。母からお酒を買ってくるように頼まれ、従弟の手を取り買物に出かけた帰り道、突然の空襲警報のサイレンの音、山頂より 2 機の戦闘機、胴体には星のマークがくっきりと、轟音と共に機銃掃射の赤い炎が土煙をあげて目の前を通過その瞬間、操縦士が私に向かって手を振ったように見えました。夢中で近くの民家に飛び込み、そこには老夫婦が居て「声を出さないように」と言いながら、座布団などを何枚も掛けてくれました。右手には伯父さんの大好きなお酒を、左手には従弟を、息を殺して解除を待ったあの光景が、今でも

はっきりと思い出されます。その母も、平成5年、75歳で父の元へと旅立ち、御殿場ライオンズクラブ165人目の献眼者として一生を閉じました。

私の妻は御殿場市新橋生れで、子供達は一男二女で御小、御中卒であります。御小の校庭の森にそびえ立つ忠霊塔には父の名前も刻まれており、可愛い孫たち3人が巣立って行く姿を見守っていてくれたことでしょう。

「英霊顕彰」の大切さ、命を捨て必死で戦い守ってくださったこの日本を我々は大事にして、次の世代に引き継いでいくことをお誓い申し上げます。

（会報ごてんば2021年1月号より）

苦難に立ち向かった親祖先に感謝

御殿場市遺族会　横山俊英

私は昭和16年11月2日生まれ戦中戦後の苦難を味わいました。

生まれた年の昭和16年12月8日には真珠湾攻撃があり大東亜戦争に突入しました。まさに戦中に生まれたのです。私が生まれたのは小山町藤曲、自宅は富士紡績の近くでした。富士紡績は駿河小山駅隣にあり軍需品としての布地を作っていたのでアメリカ軍の標的にされたと聞いています。

ある時（昭和20年7月30日　私3歳8ヶ月）朝方、空襲警報が発令されました。

近所の防空壕に逃げる時間がありません。防空頭巾を被り、座敷の柱を背にして布団を被る父のあぐらの中に飛び込み、父は私を抱く様にかばい戦闘機の去るのを待ちました。富士紡績が空襲を受け多数の社員が亡くなった事を後から知りました。我が家でも爆弾の破片が飛んで来て玄関のガラスを割り、台所の屋根と床にも破片で穴が開いていました。空襲が終わった後、屋外に落ちていた機銃の薬きょうを近所の伯父さんと拾い側溝に捨てたのを覚えています。これは危険だと我が家でも庭に防空壕を掘り始めました。しかし、深さ十センチほど掘った所で作業が幾日も進まなくなりました。何故か？戦争が終わったからでした。昭和20年8月15日です。

戦争中から続く更なる食糧難が始まります。米、さつま芋、大豆の粉、コーリャン、砂糖、魚、マッチなど配給です。配給には無いカボチャのつる、ぎぼうの葉の混ぜ御飯、カエル、雀、なども食べました。在郷軍人だった父は結核に罹患し、戦争が終わった1年後の昭和21年9月24日自宅で病死しました。私4歳10ヶ月です。父を失った我が家では父が建てた自宅を売り払い、実家の御殿場市中清水に移り住みました。実家では農業を少しやっていたので何と

か米にありつけたのです。家が売れなかったら一家心中をしていたと、母はよく言っていました。

私の家では、昭和 11 年 3 月に父の弟が千葉県館山航空隊で戦闘機の操縦訓練中に僚機と接触、3,000m 上空から墜落死（27)、昭和 18 年 3 月にはやはり父の弟がニューギニア方面海上でアメリカ軍の攻撃を受け駆逐艦朝潮と共に沈没死（29）しております。

ニューギニア叔父の戦死 4 カ月後に生まれた一粒種の息子は、母親の離婚によって孤児となり、実家の祖父に引き取られました。そして引越し合流した私達兄弟の弟として一緒に生活することとなりました。家族合わせて 7 人、この時期の祖父と私の母の食糧確保のための農作業の困難さを思う時、ただただ感謝するばかりです。

私は戦死者が眠る我が家のお墓、地区の殉国碑、静岡県護國神社、靖國神社、無名戦士の千鳥ヶ淵戦没者墓苑、沖縄静岡の塔に参列しお墓参りの究極を体験しています。75 年前の戦争を元とし平和を末（すえ）とするなら「元を忘れず末を乱さず」この教えを多くの人に語りかけ「英霊顕彰」（我が国を守るために尊い生命を捧げた人に感謝すること及びこのことを次代に継承してゆくこと）の大切さを継承して参ります。

戦争の惨禍の継承を思う　　伊豆の国市遺族会　村越興次

令和 3 年の政府主催の全国戦没者追悼式に、初めて戦没者の配偶者の参列がなかった。遺族の高齢化と新型コロナウイルス感染対策のため規模縮小し行われた追悼式、英霊の皆様にはさぞ淋しい思いをされたことでしょう。

父は、南洋パラオ島にて終戦を迎え帰還船を待つ間に戦病死しました。父亡き後の一家六人がたどった道は、悲惨と苦労の連続でした。母一人での働きでは六人家族の生活ができず、私は叔母の家に、兄と弟は父の実家に預けられ、家族はばらばらに。ようやく、昭和 27 年に一家そろっての生活ができるようになりました。母が一番苦労した時期でもありました。

私はその母の苦労を身を持って知り体験しているので、今でもあの母の苦労した姿は一日たりとも忘れたことはありません。その母も、平成元年に 80 歳でこの世を去りました。

これからも、2 度と戦争の惨禍を繰り返さないことを、後世に継承していくのが今を生きる我々の務めです。

私の思いは、今こそＡ級戦犯を除く 310 万人の英霊が眠る、国立の戦没者墓

地を作るべきだと思っています。誰でもがお参りができ、平和を願う場所があっても良いのではないか。先の大戦の犠牲者の上に平和が成り立っています。戦争の悲惨さを後世に継承する意味でも作る意義がある。

靖国とのしがらみもあり実現は難しいと思うが、遺族としてはそれくらいの夢は持ってもいいではないか。

私の終戦と戦後について　　伊豆の国市遺族会　水口一弘

私は昭和 18 年生まれであり、終戦を迎えた昭和 20 年 8 月には 2 歳になる少し前でしたので、戦争のことは何も理解していませんでしたが、物心つく頃から、まわりの皆は父親がいるのに、自分だけ父親が居ないのが不思議でした。少し経ち、父親は戦争に行き未だ帰らぬことを知りました。それからは父が早く帰る事を心待ちにしておりました。

母は、父が残したミカン山を一生懸命守っておりました。幼い私には何も解らない事でしたが小学校に上がるころから、母を手伝いミカン山へ草刈りやミカン取りに行った記憶があります。帰りにはミカンを、背負い籠一杯にして担いで帰った記憶があります。そんなある日、近くの子供達が（父が帰って来たと）騒いでおり、母が「ほんと」と言い目が輝いたのをはっきり覚えております。しかしそれは私の叔父であり、母の弟が訪ねてきただけでした。後に分かったことですが、私の父は昭和 19 年 12 月に徴兵され、旧満州国に行ったそうです。父の戦隊は昭和 20 年 8 月 14 日に全滅したとのことでした。それでも母は戦死した事が受け入れられず、父はきっと帰って来ると信じて待っていたようでした。私が小学校二年か三年ごろ、ようやく母もあきらめたようで、父の戦死を受け入れたようでした。

そして我が家に届いた戦死公報には（昭和 20 年 8 月 13 日旧満州国において戦死）とありました。何も知らない小学生の私は、その時「戦争がもう 3 日早く終わっていたなら、父は生きていたのだ、なぜもっと早く終戦にならなかったのか」と心の中で叫んだのを鮮明に記憶しております。

戦争で私たちは一番大事な父親を失ったのです。私は戦争の記憶はありませんが、子供のころの、体験と思いをつづらせていただきました。

あの戦争は何のためか　　伊豆の国市遺族会　滝口久富

先日の深夜、「なぜ、主婦達が太平洋戦争に係わってきたか」についてＴＶ放映があった。ＮＨＫ制作だった。

お国のためにと、自分が育てた息子達、かけがえのないご主人を戦場に送り出す光景、今考えると、本当におかしい。赤紙が来たからと、生きて帰れる保証がないのに何故万歳に送られて出征したのか…、近所中がどの家族も楽しんで送り出しているかのように見えた。おかしい。そうしなければ残った家族は生きていけなかったのか。

母が、姉が、弟が好き好んで送り出しているはずがない。戦場の状況も解らず、又、何の目的で戦争をしなければならないかも知らずに、この戦争は本当に必要だったのか。

私の父は薬剤関係の仕事をしていた関係か、衛生兵として任務に就いていたようだ。終戦後、帰国中に病死したと聞いている。負けた戦争なので、帰国もそうた易くなかっただろう。難渋を極めたに違いない。

親戚の結婚式や法事で父の生前の様子を耳にすることがある。父は御殿場出身、沼津に出て、薬屋に勤め、店を任されていた様だ。親戚の者もよく沼津の家を訪ね、そこから職場に通ったとも聞いた。戦争でその家も焼失し、母親の長岡の実家近くに疎開、その頃の記憶が少し残っている。しかし父の顔は記憶の中にはない。

母は百歳と長い人生であった。戦争についての話を聞いた記憶は無い。

毎日せっせと子供達のために仕事に通っていた。定年後は姉夫婦と一緒に暮らし、ごく普通の、毎日変わらない平穏な日々を過ごした。そのことが、少なくとも良かったと思う。

戦後 20 年間は復興の名のもと、ただ働くだけ、その後は平和で平穏な生活に浸り 50 年たった。

何の戦争だったのか、何でそんな戦争のために多くの人が亡くなり、苦労したのか…

平和っていい。何ていっても平和がいい。

大連から引き揚げ　　**函南町遺族会　太田輝彦**

昭和 22 年 2 月いよいよ内地への引き揚げに向けて乗船開始です。母と、妹 4 歳、私 6 歳、大連港出港です。これで内地に帰れる。間もなくそこかしこで船酔いにより吐き気を催す人があちこちで見られました。

顧みますと今回の乗船は 2 度目の乗船でした。1 度目は 1 週間前にも大連港より出港の予定で港に行ったのですが乗船中止となりました。内地に帰れると思いささやかな手持ちの材料で晩餐をしました。布団も生活用品も全て知人に

譲って大連港に行ったのですが乗船中止でした。

その間の生活は大変でした。

全て何もなく、食べるもの、寝る布団もなく知人に頼って何とかしのぐことができました。その時の母の苦労が幼い心に残ってます。

引き揚げ船に乗船しこれで内地に帰れると強く思いました。冬の日本海は大荒れです。大きな雪が横殴りで降ってます。船酔いの人が多く、いやで甲板に行くと吹雪で寒くて5分とは居られず苦しい思いをしました。幾日かの後、内地が見えるとの声で、甲板に出ると陸地が小さく見えました。やっと内地に帰ってきた、白いご飯が食べれると思いました。

舞鶴港に入港し最初大きなお風呂に入りました。大きなプールのようで半分をロープで仕切ってあり、私たちが入った隣で係員が網で垢をすくっていました。でも、とても暖かくようやく内地に帰ってきた実感がしました。

後の調査で

上陸地　舞鶴港　昭和22年2月21日　栄豊丸

太田輝彦　男　6歳　長男　在留地大連市

母　太田きそ江より届け出あり　　記載ありと

戦争末期の体験　　**函南町遺族会　柳本兌夫**

終戦当時、私は小学校三年生（9歳）の学童で、まだ右も左も、父や社会のこと、戦争のこともわからない年齢でした。戦況が厳しくなるにつれ、夜間の燈火の管制もされ、戦闘機やB29の編隊が本土上空に飛来、恐さがずっとしていた事を幾つか思い出して見ました。

母や兄弟と防空壕の中からそっと外を見たり恐さに震えていたこと

私が通っていた函南小学校まで3kmの距離を往復していましたが、通学路から少し離れた場所に川を堰き止めた農業用水があって子供達にとってよい遊び場でした。下校途中夏の間（6月～7月）川に入って水遊びするのも日課でした。数人で楽しんでいると、国鉄の丹那トンネルの西側に函南駅があり、近くにエボナイト工場もあって高い大きな煙突がそびえ立っていましたが、突然飛行機の急降下の音と共にバリバリという機銃掃射の音がして2機の戦闘機が、駅か工場かを狙って入れ替わり頭上を旋回し3回繰り返し去って行き、自分達が狙われているような錯覚をして、土手の草にしがみつき顔だけ水面に出して終わるのを待って居たこと

B29が東の空から西の方向に飛来、前方には逓信省関連の施設があり狙われ

たのか、噂では軍の飛行機に追われて機体を軽くするために爆弾を捨てたのでは…と、数 100m 離れた水田に落下、高い土柱が上がる様や、陽が沈み暗くなった頃、沼津の街に焼夷弾が多数投下され、空が急に明るくなり 10km も離れた函南の地でも昼間のように明るくなり、爆音と共に恐い思いをしたことを忘れません。罪もない市民を巻き込んだものであり、人が人を殺傷する戦争は再び起こしてならない事を子供心に感じていました。

前述したように学校まで距離があり集団で登下校をして居ました。帰るため学校横の来光川の堤防で上級生と集まって居たところ、西の空から低空で小型機が学校上空に飛来、この地域を 3 回旋回して最後に翼を右左に 3 回振って西の空に飛び去って行く（帰る）機体を目の当たりにしました。上級生の話ですと、これから軍の特殊任務に赴くため、故郷の両親や家族にお別れの挨拶に来たのだ…と聞かされ、例えようがない感情が湧いて来ました。後になり軍の厳しい状況の中、そのような作戦があった事を知り悲しい思いをしたことも甦ります。

悲惨な戦争を如何なる理由でも決して行ってはいけない行為であることを考え、全ての人々が平和で安心した生活が営まれることを祈ります。

母　の　戦　争　　**長泉町遺族会　芹澤和子**

父の声ひと度なりと聞かしめよ海に向ひてわれは乞ふなり

海軍への令状握りわれを抱き慟哭せし母遠く記憶に

黒き布電球にかけ身を寄せ合ひＢ29 去るをただ待ちゐき

艦砲射撃のやみし束の間われを負ひ川に飛び込む母にてありき

写真のほか見しこと無かりし父上よ「そちらに行ったら私を見つけて」

久びさに休暇をもらひ帰省せし父の両手に金平糖ある

銘仙の己が着物を朱に染めて姉とわが服縫ひくれし母

セピア色の写真の中の父を見てお前に似てると亡き兄言ひし

靖国にせめてと父の戦死の地指になぞりしを言ふ墓処の母へ

提灯の境内埋むる盆の夜灯りが「護国の森」を彩る

御明りを灯し玉砂利を踏みゆけり兵なる父の踏みけむ参道

海兵の父に抱かれし一歳は齢八十歳（はちじふ）の現在（いま）をし歩む

巴川に飛び込み焼夷弾逃れしとふ三人子(みたりご)抱へし母の戦争

巫女舞の袴の緋色冴へざへと護国の杜(もり)の静寂を享し

あれから50年　　**静岡市静岡遺族会　丸山千代子**

父が戦死したのは母が24歳の時、幾多の苦難の道をたどりながら、もう早いもので喜寿を迎える年になりました。

私の父は南方の「ニューブリテン島」赤道直下の大変暑い所で熱病に冒されながら戦い、戦死しました。私が3歳の時です。妹は7カ月位だったそうです。

私には父との思い出はほとんどありません。ただ1枚の絵の様に覚えていますのは、ガランとした家の中で父と2人火鉢を囲んでいたのを覚えています。母に話しましたら、その時は戦地に発つ時で、農家は稲の脱穀で一番忙しい時だったそうです。母も一緒に居られなく、心残りだったと思います。

あとはっきり想い出の中に残っていますのは、頭上に敵機一機、B29が姿を見せ飛行機雲をひき西方に飛び去って行く。小学校一年生。空襲警報が発生するたびに学校からいも畑を走り家に帰るのです。その時は、集団下校をするんですが、父親の居ない私はいつも一人で泣いて家に帰ったものです。夜には防空壕に入ります。静岡市内に焼夷弾が落とされますと南西の空が燃えてしまうのではないかと思う程真っ赤になりました。

そのうち兵隊さん達が家のお風呂に入りに来る様になりました。よく色々な話をしてくれました。それから間もなく終戦になりましたが、当時は父親のいない子供はよくいじめに会いました。物不足の折でしたので、教室で何かなくなると取らなくても取ったと言われ「片足でもいいから父に帰ってきてほしいとどんなに思ったことか。」それから親子3人で頑張ってきました。

新聞など読みますと政府は日本が全面的に悪いのを認める様な発言をしたり、外国へ行けば無名戦死者をお参りしたりしますが、あの当時国を守って多くの人が戦死したのに靖国神社へのお参りはなぜしないのか。赤紙一枚で戦地に送り出され帰らぬ人となった人達はどんなにか悔しいと思います。

あれから50年。消え去りつつある空襲、戦火、2度と再びあってはならないと思います。　　（平成12年発行「噫呼お父さん」より）

報　恩　感　謝　　**静岡市静岡遺族会　斉藤守代**

平成7年3月26日、「白寿を迎えて」という自伝を出版いたしました。その

中から「戦後の苦しかった思いで」を抜粋させて戴きました。

私は、明治 30 年 8 月 28 日静岡市安西 5 丁目 5 番地に出生し、本年 99 歳で元気に白寿を迎え喜び一杯でございます。なぜ 99 を白寿と言うのか、白は「百」の字から一をとったかたちであることから白寿と言うそうです。

19 歳で腕のいい蒔絵師と結婚し、20 歳で長女を出産、以後 20 年間に 12 人子供を産み、弟子が 4・5 人も居た時期もあり、その上に姑の世話、大勢の子供達の世話も満足に出来ず、三度三度の食べることに追われ全く目のまわる毎日でした。

長男が家業に就き、長女・次女も外へ働きに出るようになった頃、世の中は段々慌ただしくなり戦争が近付いて来ました。物資も急に統制になって、蒔絵の仕事も少なくなり、その上材料を集めるのも大変になりました。とうとう戦争が始まり、昭和 18 年長男（栄作）22 歳の時召集令状が来て軍隊にとられました。当時弟子 2 人にも暇を出し、急に家の中が淋しくなりました。それでも主人と私、子供達 8 人、計 10 人の大家族は並大ていではありませんでした。

昭和 19 年太平洋戦争は益々激しく、北方南方の各地で玉砕のニュース。内地の大都会は空襲の毎日。静岡もいつかと心配されましたが、昭和 20 年 6 月 19 日夜とうとう空襲にあい、私達一家も命からがら逃げ迷った時は生きた心地がしませんでした。皆様も同じ思いをされていると思います。主人は爆弾の破片で頭に重傷を負いました。私は子供達を大声で呼び集めて、逃げるのに精一杯です。安倍川を越え藁科川を越え、振り返ると静岡の町は火だるまでした。吉津までたどりつき全員の無事を確かめた時、体中の力が抜けてへとへとでした。丁度そこにお寺があったので、住職さんにお願いして休ませてもらいました。外にも 2、3 の家族が同じように逃げて来ていました。ご住職や奥様のご好意で、それから暫くお寺の本堂の一隅を借りて住みつくようになったのです。

悪いことは重なるものと申しますがその通りで、長男の戦死公報が入りました。サイパン島で玉砕です。主人と私、只ぼうぜんと公報を受取りましたが信じられませんでした。主人の頭の傷もひどく、薬らしい薬もなく治療は大変でした。

焼け跡の防空壕からわずかな食物と鍋釜をやっと探しだし、配給されたジャガ芋だけの生活です。着たきりで着替えもないし、布団も紙で出来ている大きな袋のようなものを手に入れて、みんなでゴロ寝でした。私は必死であちこち歩き回り食べるものを探し集めるのに苦労しました。幸いタンス 2、3 本を知人の家に疎開しておいたので大助かり、しかしそのタンスの中身は大半お米や

お芋に化けて食いつないできました。

やがて終戦となり、主人の仕事先の問屋さんが、焼け残った倉庫の 2 階を貸してくださり、やっと落ち着くことが出来ました。戦争中から敗戦までのさまざまな苦難は、皆様方も全部体験されていると思います。もっともっと苦しい体験をされている方から比べれば、私の苦労など苦労ではなく、むしろ当たり前かも知れません。

昭和 22 年、問屋の御主人のご好意で鷹匠町の土地を貸してくださり、そこにバラックながら我が家を建てる事ができました。まだまだ周りは焼け跡の空き地がたくさん在りました。バラックとは言え人並みに家を持てた嬉しさは忘れられません。

まだまだ戦後の混乱が続いていた時ですから主人の仕事は無く、収入もなく困っていた所、ある人に勧められ商売をすることになりました。当時闇市と言われた七間町に、露天商となって屋台を作り、履物を売る店を出したのです。私も店を手伝いながら、荷を背負って行商に出るようになり、よく歩きました。市内は勿論のこと、遠く牛妻の方面まで足を延ばし売って歩きました。今考えると、女の足でよく歩いたものだと自分で感心しております。今日まで丈夫で来たのも、あの頃足腰を鍛えておいたのが良かったんだなと思います。

皆様方も若い内に体を鍛えておいて下さい。年を取るにつけそう思います。

〇夫に仕え 12 人もの子を育て、白寿迎えて今日の歓び

〇白寿迎え百歳越えて茶寿皇寿迎え給えとひた祈るかも

（平成 12 年発行「噫呼お父さん」より）

短　歌　「　波　の　は　た　て　」　　静岡市静岡遺族会　為貝たか

やうやくにたどり来しニューギニアの野の果てに君在すごと仏桑華咲く

ニューギニアの大草原を焼く野火のけむりの中に若き夫顕つ

一握の砂一椀の水おろそかならずニューギニア島夫眠る島

丈余なす草原となりし飛行場跡にいまだ放置の戦闘機残骸

あやしげな英単語ならべカナタ族よりようやく購ふ木彫りタンバラン(守護神)

ニューギニアの土にて焼きしまろき壺耳を寄すればとほき海の音

機窓より蛇行果てなき大河見ゆ夫眠る国はるかとなりぬ

生きている父を欲しいと駄駄をこねし子は 51 歳とほき戦い

子を負ひて玄界灘を帰り来し 25 の吾の若くありき

ビタミン剤母体に良しと記しあり軍事郵便の文字はうすれて

戦争はあんなものではないと思うビルマの竪琴孫と鑑賞す
韓国へ三度びパプアへ再びを訪ひし遂に夫に逢はざり
仮の日ながら迂闊に過ぎし秋の忌日幾度めぐるわが契の日
南溟に果てしとのみに 40 年 50 年をも待ちて終らむ
君の背に寄り添ひて聴きし玄界灘の冬濤の音耳にひびけり
わだつみの波のはたてに君在ますまどふことなく 50 年を過ぐ
三度わが訪ひしパプアの密林にいちにんの声遂に聴かざり
露ふふむ芝生にいねて時ながくサザンクロスをあふぎしかの夜
ゆったりと寄せてくる波は波を追い光りて椰子の根方を洗ふ
携へ来し卒塔婆ねもごろに納めたりコスモスゆるるパプアの御墓辺

戦没者　陸軍少佐　為　貝　超　禅
昭和 19 年 10 月 19 日
東部ニューギニア　ボイキン付近に於いて戦死

（平成 12 年発行「噫呼お父さん」より）

短　歌　「　惑　　星　」

杳きソールよ共に仰ぎし葉月の雲に遅速のありて君今はなき
玄界灘を越えて征きたる君なるに領巾(ひれふ)振れざりき昭和かの年
ニューギニアに征きませし君の好みたる「日日是好日」我は清書す
陰膳とふ言葉ひそひそよぎりゆく蝉の声とぼしき冷夏八月
おもむろに立ち上がる雲けものめく 12 月 8 日風もあらぬに
新年になれば復員が始まるらしい・・・あれから待ち待ちし 60 余年
君が代に戦(いくさ)はありき君の為きみは征きたり夕茜雲(ゆふあかねぐも)
清水(きよみず)の舞台を脇にしてすぎしわが 60 年か日照雨(そばえ)ふりくる
「南海の父に逢へたでせうか」その母の訃報に添ふる子よりの便り
土産には塩が一番とニューギニアの戦跡巡拝団奥地へ向かふ
ニューギニアより生きて還りし尊き命(いのち)鬼籍に入りしと聞く秋の夜
たたかひは遠きにありと思ひゐしに自衛隊の靴音空(そら)耳ならず
大東亜戦争歴史の中に編まれたり年代表を子等は暗記す
賜はりし余生さやかに過ぎゆかな 88 歳日日やすらかに
手をつないで・・・それは良いけどわが君は何億光年光の惑星
弟よ
勲章も供ふるなくて魂棚(たまだな)はただ姉妹(はらから)の憶ひにかざる

家中を追ひかけつこせし弟の面輪(おもわ)顕ちくるとほき夕星(づつ)

（平成 20 年発行「噫呼お母さん」より）

涙　　雨　　**静岡市静岡遺族会　黒瀬良夫**

戦跡慰霊巡拝のことをＡさんから知らされてから数年の歳月が流れた。そして、待ちに待ったフィリピン行きの大型ジャンボ機の機内にいま私はいる。Ａさんからおくられた写経を胸のポケットに、膝に抱くリュックには、母の遺骨の小片が真綿に包んで入れてある。

レイテ島のタクロバン空港に到着したのは 8 月 24 日午後 3 時 50 分である。そのままブラウエンの慰霊地を訪れたので、宿舎に帰ったときすっかり暗くなっていた。

ここで私たちは思いがけない人物にお会いすることになった。20 数年間英霊の収骨を自費で進められている千葉県の山下伸一氏と、この道を共に歩む東京都の間宮春生氏である。山下氏は旧日本軍の生き残り兵、間宮氏は大岡昇平著「レイテ戦記」の編集者で、共に 70 歳、毎年島民の家に泊り、島民からの情報を唯一の手掛かりに山野を歩き巡るのである。数々の信じがたい事実を見てきたお二人は、いま霊の存在を固く信じている。両氏の部屋には収骨されたばかりの遺骨と遺品が大きなダンボール箱 2 つに納められ、線香の香がたちこめていた。

山下氏はすでに 1,000 体の御柱を収骨されたという。宿舎のうす暗い電燈に照り出されたお二人のお姿は生き菩薩そのものだった。

夜が明けて 25 日、レイテの空は薄い灰色の雲で覆われていた。フィリピン特製のジープニィに揺られて道路わきの椰子の葉でつくられた家々を見るにつけ、島民の中に兄が生きているかもしれないと思ったりしたが、この島で老人達の姿を見かけることはほとんどなかった。そのかわり地から湧いたように、どこでも子ども達の元気な姿を見ることができた。

かつてレイテは戦火でとだえ果て、新生レイテがいま生まれつつあるように思われる。

それにしても私の兄はこの島の何処で昇天したのだろうか、そして私の抱く母の骨はどこに埋めたらよいか、迷ったあげく私は生前の母が湿気を嫌ったことを想い出し、カンギポット山裾の小高い丘の上の第一師団戦没者英霊之碑の傍らに骨を埋め、郷里から持参の水をその周辺に撒いた。ふと前方を見上げるとカンギポット山が青黒い頂を雲間に見せていた。

すでに1時間ばかり前から振りはじめていた霧雨で木々の葉はしっとりと濡れうなだれていたが、慰霊祭が終わると空は嘘のように晴れわたり南国の太陽がまぶしく輝きはじめた。

その夜の宿舎で、「あの霧雨は、涙雨なのだ」自分に何回も語りかける私だった。

・母の骨レイテに抱き兄眠るカンギポット山に埋めむとす今

・焼香のわれら見つむる墓守りの島の老女の瞳やさしく

・いまもなほ遺体探せる往き菩薩山下伸一氏とレイテにまみゆ

・暑き夜は道端に佇み涼をとる清き眼をもつレイテの子らよ

・物売りのバス叩く音フィリッピンの悲哀こもれりうつむきて聞く

（平成12年発行「噫呼お父さん」より）

父よ母よ戦争のない時代に生まれかわって　静岡市静岡遺族会　中山淳次

私の父は、4回程出征を繰り返し、家に居る事が少なかった。母は留守を守り、子供を育て、懸命に働いた。

母の実家の弟達は、人一倍体格も良く、頑強な体軀であった。当然軍隊に召集され、二人共相次いで中国戦線で戦死した。

下の弟は、故郷を出てから一年も経っていなかった。

そしてあの大きな体の叔父が、小さな白木の箱に納まって帰って来た時、祖母は遺骨をしっかり抱いて、いつまでも嗚咽していた。当時小学生であった私も、今でも脳裏に焼きついている。

そして苦しい戦いは終り、日本国中焼野原になっても平和は戻って来た。

音信の無い父であったが、必ず生還するという思いは変わらなかった。その思いも空しく、終戦の翌年悲報は届いた。ルソン島の山中で、空爆と、全く食糧の無い中で、日本兵は殆ど亡くなって逝ったとか？

当時13歳の私は動転し号泣するのみであった。

母の思いは想像に難い。食事も採らず、一週間程伏していた。実弟二人を失い、又父も帰らぬ人となった思いは如何ばかりであったろう。

然しその悲しみと苦悩を乗り越えて、子供達の為に立ち直ってくれた。それから母の戦いが始まった。農家とて、病弱な祖父と、母が中心で、米、麦、芋等、お上への供出という名の賦課は厳しかった。自家用の米はなくなり、麦に芋の入った食事が常食だった。

そして30年、ようやく生活も落ち着いた昭和55年、「戦争はいやだ」が口

癖だった母は、苦闘の一生を閉じた。終戦1ヶ月前の7月、父が逝って33年目の同じ7月の暑い日であった。

戦争という過去を、歴史の遠い物語としてのみ知る現代の若い人達に、戦争の惨禍と平和の尊さを語り伝えて行く事が、私共の責務であると思う。

南の島から渡り鳥の背に乗って来た父の魂が、子供達、孫、曾孫達の幸せを見守ってくれている様な気がする。そして何よりも喜んでいるのは、戦争のない故里の姿であろう。

父よ母よ、今一度戦争のない平和な時代に生まれ変ってほしい。

（平成20年発行「噫呼お母さん」より）

母の「三回忌」を前に　　静岡市静岡遺族会　西澤宣二

一昨年の秋も終わりに近い11月の末、95歳の波乱に満ちた生涯を閉じた母の三回忌を間近に控え、遺品の整理を漸く手掛けようとしている。

静岡大火、空襲と立て続けの被害に遭ってきた我が家に、思いもよらず戦前の父と母のアルバムが見つかった。大火の時は持ち出し、空襲の時は生家へ疎開させたであろう母の唯一の嫁入り家財の箪笥の一番下の引き出しに3冊、しっかりと風呂敷に包まれていた。私が初めて見るアルバムであり、初めて見る写真が殆どである。その中の父母の結婚式時と家の前の路上で並んで写っている2枚を仏壇の置かれている居間に掲げてある遺影にそれぞれコピーして収めた。

母は、志太郡東川根村（現榛原郡川根本町）の、隣家まで100m以上離れ、たった4戸の山間部落の9人兄弟姉妹の6番目4女として生まれた。山間僻地の貧しい大家族故に、幼少の頃より親類の子守として預けられ、尋常小学校卒業と同時に遠縁に当たる静岡の洋服仕立て屋に女中奉公する身となり、後に洋服仕立て職人として奉公していた父と結婚（昭和11年4月）し私と妹を儲けた。

父は昭和11年夏横須賀海兵隊に配属、志那事変に参戦し14年に帰着、17年1月再び横須賀に召集され、4月（妹が誕生する5日前）に佐世保より通信兵として輸送船に乗り、11月に船諸共海の藻くずとなった。

以降、幼い二人の子供を抱え母の苦悩は始まった。静岡大火より漸く立ち直りかけた矢先の事であり、そうこうしている内に空襲が激しくなり、私達は一旦母の生家に仮疎開した。静岡大空襲の3週間前のことである。静岡の家は焼失し、帰り住む処の無い私達は、母の姉の嫁ぎ先の穀物倉（みそ部屋と呼んで

いた）の床にむしろを敷き寝起きをさせてもらった。母は生計を立てる為、日中は山仕事、茶摘、畑仕事の手伝い、夜は裁縫の経験を活かし、近隣の人達に頼まれた縫い物や繕い物にと明け方近くまで働いて居るのを見た。食糧難の時期、分けてもらえる物も無く、豆糟、芋類ならマシのほうで、さつま芋のつる、木の芽までも口にしたものである。

数年経って母は発送電会社の雑役婦として雇ってもらい、何とか生計を立てる事が出来た。その後電力会社の寮賄婦として 60 歳まで働き通した。その間再婚の話も幾つかあったようだが、その都度「うちの人はきっと帰って来る」と言いながら私達兄弟を育てて来てくれたのである。

そんな母の姿の内、私の脳裏にはっきりと残っている最も旧い記憶は、父の戦死の公報を持ってきた祖父と偶々来ていた母の妹と三人で大泣きをしていた姿である。爾来母の涙を見た事が無い。どんな時もにこにこと笑顔で、人の言う事には必ず耳を傾け争う事無く、人の嫌がる事にも避けて通らず、愚痴一つ聞いた事無い。人との出会いを大切に感謝・感謝の一途であった。

朝夕、英霊となった父の御霊の神棚と父の位牌を祀ってある仏壇に向って手を合わせ「今日も一日生かさせて頂き有り難う」と拝んでいる姿は、私の脳裏にある最も新しい母の記憶である。

88 歳、89 歳と立て続けに左右大腿部上部骨折のため没するまでの約 5 ヶ年は歩行の全く出来ない生活であったが、介護する私に気を遣ってか、デーサービス・ショートステイにも喜んで行ってくれたものである。

しかし、私には不思議に思えてならないのは、亡くなる 4 日前の朝、5 泊のショートステイに出掛ける時だけは、「今日は行きたくない」と言い、施設でも食が進まないと介護士より報告があり、2 日前には夕刻私を呼び寄せ、私に「色々と有難う」と言い、「これでご飯が食べれる」と私に向って手を合わせた事である。

来月には、親戚縁者に出向いて頂き「三回忌」の法要を営む事としている。国の為とは言え、若くして尊い命を散らした父達の英霊、戦中戦後の苦難の時代を生き抜いて来た母達に、顕彰と感謝と供養をする事、あの忌まわしい戦争の悲劇を絶対に起こしてはならないと、今何不自由なく平和な生活をしている私達が、子供達や孫達に言い伝え行く義務があると思いを新たにして、朝夕神棚・仏壇の水替え・掃除、神に拝礼。釈迦如来・父母の位牌に向って般若心経他の読経を欠かさず、週一回の墓参には孫達も同行してくれている。最近では息子と孫二人も声をあげて読経をしている。

合　掌　　（平成 20 年発行「噫呼お母さん」より）

周りの皆に助けられて　　静岡市静岡遺族会　渡辺タキ

18 年 4 月 4 日が私の結婚式でした。結婚式といっても身内だけで三々九度の盃を交わしただけでした。その披露宴の最中に警戒警報が発令され、大変でした。花嫁姿のまま静岡市内の中町から電車に乗り鷹匠町に帰りました。丁度其の日朝から雨が降りそれは大変でした。

19 年 1 月に主人が戦地に転勤となったのですが私のお腹に子供があったので私は静岡に帰ってきました。そして 7 月 28 日に長男が生まれました。

20 年 6 月 19 日のいまわしい静岡の空襲です。それは大変でした。防空壕より逃げた方がよいと思い、母が息子を抱いて清水公園の山に逃げました。山の上で見ていると飛行機が頭の上を旋回していましたが、その内に焼夷弾が落ちてくると思って見ていると、落ちた所に赤い火が燃えひろがっている。落ちて「パッ」と明るくなりそこが燃える燃える、辺り一面明るくなり昼間の様でした。本当に全部焼けてしまったと思いました。

丁度それは 15 年 1 月 15 日の静岡大火と同じ様に空は真っ赤っかでした。家に帰ったら皆焼けて石の門柱だけ残り、あたり一面焼け野原になり、何もありませんでした。そして家の防空壕の中で父が死んでおりました。

父を焼くために、担架に乗せて安倍川の川原に持っていきました。本通りには黒焦げの死体がごろごろしていてトラックに乗せて同じ様に川原で焼きました。本当に人間の形をした炭でした。

戦争中は、主人の給料を頂いておりましたが、終戦で恩給は停止、幼い長男を母親に預け工場で働いたり、保母の傍ら深夜まで内職したこともあります。

主権回復後の 27 年遺族援護法が施行されて翌年には恩給法が改正され、停止していた軍人恩給や公務扶助料が復活、しかし当初は金額もわずかなので納税勧奨員、病院調理師として働き続けました。「公務扶助料」は本当に欲しい時にもらえなかったので座り込みもしました。

色々な事がありましたが、私は自分の母親が側にいて息子を見てくれたので働けました。本当に感謝しております。いつも母に有難うでした。

（平成 20 年発行「噫呼お母さん」より）

私のサイパン　戦死した父の面影を追って

静岡市清水遺族会　深津芙美子

昭和 17 年 9 月、27 歳の父に召集令状が届いたとき母は 22 歳、私はまだ母の胎内でした。父は静岡 34 連隊に所属、出征するまでの一年半は静岡連隊内におりましたので何回か面会したそうですが、私が 1 歳 8 カ月のとき戦死した父ですので、私にとっての父は仏壇の上に掲げられた写真でしか知ることができませんでした。

連隊が出発した日、祖母と私は静岡市鷹匠町の親戚の家に泊まり、表門の前で待機していたので、北門からとの情報を聞き回ったときは、すでに出発した後で見送ることもできなかったと聞きました。父の乗った列車は原駅に停車していたと聞き、知っていればせめてひと目でも会いたかったのにと母は言っておりました。

5 月下旬、横浜港に停泊中の船内で書かれたはがきが、当番兵の好意で投函され、家に届いたとのこと。残念ながら現在手元に残っていないので、私は内容も知りませんが、「後を頼む」というような、死を覚悟したととれる文面であったと聞いております。

母は 24 歳で未亡人になり、祖母と父の妹、私の四人家族の生活を守ってくれました。平日は製紙工場の工員として働き、日曜日は祖母と二人、少しばかりのみかん山と野菜畑の農作業をして生計をたてておりました。150cm 足らずの小さな体で、一度に 60kg あまりのみかんを背負い、山道を 4 往復していました。無理が続き、多発性慢性関節リウマチになり、手足の関節がひどく変形しておりました。それでも祖母を葬送り、祖母の七回忌の年の昭和 61 年 4 月、66 歳で亡くなりました。母は常日頃「一度、お父さんの戦死したサイパン島に行ってみたいけれど、この体では無理だから、あなたたち夫婦で行ってどんなところか見てきてほしい」と言っておりましたので、私も一度はサイパンに行ってこなければと思っておりました。

私の家では、父がサイパン島、父の弟がルソン島で戦死しておりますので、護国神社の命日祭には 3 月と 7 月の年 2 回参列させていただいておりますが、父の命日祭におまいりしたとき、護国神社の受付に 118 連隊の遺族の名簿が置かれ「遺族の方は記名してください」とありました。名簿すら存在しない『幻の 118 連隊伊藤部隊』の 50 年祭が行われることを知り、昭和 63 年 9 月 25 日、横なぐりの風雨の中参列させていただきました。荒天の中 200 名を越える参列者があり、そこでサイパン島から生還された澤野さん、土屋さんたちにお会い

することができました。帰還された方々は、玉砕から一年以上サイパンの山中で苦労されたにもかかわらず「戦死した戦友に申し訳ない」と、何回も個人で島へ行き、遺骨収集されていたとのことです。澤野さんのご実家にも私の父と同じ「昭和 19 年 7 月 18 日マリアナ方面にて戦死」という戦死の公報が届けられていたというお話を聞き、強いご縁を感じ「ぜひサイパンに連れて行ってください」とお願いしました。躊躇されていた澤野さんでしたが、慰霊祭のたびお願いする私に根負けし、4 年後の平成 4 年やっと同行を許していただきました。

この伊藤部隊は 3 分の 2 が海没、島に上陸できたのは 3 分の 1 弱とのことですので、何処で戦死したか知ることは難しいことですが、父の場合たまたま静岡の連隊で同室だった方が、玉砕の前日まで行動をともにされ、「チャランカの砂浜で蛸壺を掘って身を隠したが、総攻撃の前日、椰子畑のあたりで足を撃たれ、野戦病院へ行くことになり、深津君と別れた」と証言してくださいましたので、父が上陸でき、島のどこかで戦死したと知ることができたことは、不明の方々が多い中、これだけでも幸せなのかもしれません。

平成 4 年 6 月 7 日、伊藤部隊がサイパン島に上陸した日、名古屋空港から飛び立ちました。梅雨空の日本と違い、南に進むと白い雲の下に真っ青の海、リーフに囲まれた小さい島が見えました。「あれがサイパン島だ」と教えられました。48 年前、この小さい島の周囲を 800 艘もの軍艦が幾重にも取り囲んでいたとか・・・。ここに来るまでは、泳ぎの達者な父だというから近くの島に逃げられたのでは、というかすかな希望も、島を見たとたん逃げる隙間も無いことを感じさせられました。

空港に降り立つと、サイパン時間で午後 4 時、日差しはピリピリと肌を刺す暑さです。白い大輪のプルメリアの花とサイパン桜と呼ばれた赤い火炎樹が迎えてくれました。

翌日から第 1 大隊が転戦した戦跡を歩きました。サイパン神社、南冥堂、南興神社、南郷神社、フィナシス、ススペ湖、マッピー、タッポーチョー、千人洞窟、地獄谷、五根司令部、35 軍司令部、その他、澤野さんたちの歩みに必死でついて行きました。足をとめた場所場所、涙ながらに線香を手向け、家から持参した井戸水、米を供え、供養して歩きました。

翌日、サイパン、テニアン合同 50 年慰霊祭がサイパンの南冥堂で行われ、全国から 100 名ほど参列しました。式の前日、現地人のベッティさんが「自分の畑から日本人の遺骨が出たから来てほしい」と言われるので、その畑を掘ら

せていただくと、10 体分以上のしっかりとした白骨が出てきたので、その方たちの骨は、届け出た上一緒に供養させていただきました。まだ、そこここに遺骨が埋まっていることを実感させられました。

今年 6 月、私にとって 5 回目のサイパンに行ってきました。円安のせいか日本人の姿も少なく、閉じられた店舗も多く見られ、町も寂しく感じられました。南冥堂もあらされ、日本人が建立した慰霊碑も倒されたり、壊されているものがありました。若いサイパンの島民の中には「自分たちの島を墓場にするな」と言う人もあるとのこと。

ジャングルに入り、以前入った洞窟に向かうつもりが、草や木のツルが茂り、現地案内人のクルスさんがいてさえ道に迷い、1 時間以上ジャングルの中をさまよい、目的地どころかやっともとの道に戻ることができ、ほっとするありさまでした。地獄谷の 4 将軍が自決された大きな洞窟も、風化が激しく崩れて半分砂に埋もれています。あと数年もすれば、洞窟自体形がなくなってしまうことでしょう。

第 1 大隊の軍旗を置いたというフィナシス山の洞窟も、爆撃で山の形が変わったとのことですが、洞窟と言えないほど小さな岩場です。そこに『118 連隊霊位』の塔婆と父の塔婆を置き供養してきておりますが、私たち以外この場所に来る人が無いようで、行く度置いてきた 5 枚の塔婆がそのまま残っております。

このように、実際戦場になった場所は、生還者の方の案内がなければ訪れる人も無く、朽ちて今に分からなくなっていくことでしょう。

3 年前、主人と息子二人の家族だけで、サイパンに行ってきました。風化し、朽ちてしまう前にフィナシスと地獄谷だけでも見せたいと思ったからです。戦争の是非はともかく、祖父たちがこの地で戦い死んでいったという事実の現場を見せたかったのです。息子たちは何も言いませんでしたが、何かを感じ取ってくれたものと信じております。

自然は風化し、形は残らなくても、私たちは戦没者のことを忘れてはならないと思います。サイパンは島中何処も戦場でしたから、私たち戦没者の遺族は、どんな形でも一度はサイパン島を訪れ、島の土を踏むこと、それが一番の供養になるのではないかと感じております。

平成 11 年 9 月 24 日

私と太平洋戦争　　焼津市遺族会　永田實治

真っ青な海、真っ白な砂、そして椰子の並木、白砂青松と言う言葉がありますが、松ではなく椰子の並木が並ぶ南洋の島パラオ諸島、それが私の生まれた所です。もう少しくわしく言いますとパラオ諸島アラカベサン島、ガラパン町にあった南洋庁のコンクリート官舎で生まれました。それは父が東京電機大を出てすぐ、母と結婚し友人と連れだって南洋庁の役人としてパラオにあった南洋庁に大正 12 年に赴任したからです。私は昭和 12 年 1 月の生まれですが、4 歳までその官舎で暮らしました。大きなマンゴーの木が官舎の土地を取り囲むように数本あり、何か悪いことをしたのでしょう、そのマンゴーの木に縛られた日のあった事を鮮明に覚えています。

昭和 16 年父がサイパン郵便局電話課長としてサイパン島に転任することとなり、一家は当然サイパン島に移動し、サイパン島の官舎に入りました。今思えばその年の 12 月、太平洋戦争が勃発したのです。その年も押しつまった 12 月 8 日突然ラジオから日本軍は太平洋上において戦斗状態に入れり、と放送が流れて来て、母親はなぜか〝ヤッター〟と言って手をたたいていたのを覚えています。その時は、日本は戦争に勝つものと信じていたのだと思います。しかし翌昭和 17 年の 6 月にはミッドウェー海戦で日本は大敗北し、翌 18 年 2 月にはソロモン諸島からの撤退が始まり、それからは敗退の一途をたどることとなり、昭和 18 年の後半には、サイパン、テニアン両島に空襲が始まりました。私は 18 年、サイパン国民学校に入学したばかりの一年生、サイパン島では島民と日本人が同じ様に入学し机を並べました。穏やかだった日々はほんの数カ月だったのではないかと思います。近くの海岸に連れて行ってもらい魚の泳いでいるのが見える遠浅の海で手を伸ばして体を浮かせる浮身の仕方を父から教えてもらった事、またある時は島の端にあったチャランカの池たしかそんな名の大きな池に魚釣りに連れていってもらった事が父親との繋がりの僅かな思い出です。先に書きましたように昭和 18 年の後半には空襲が始まり、登校してもすぐ帰宅、父から電話が入り今テニアンが空襲を受けているから、すぐタッポーチョウ山の洞穴へ逃げなさい、と母が指示を受けると、母は私達の手を引いて急いで洞穴に向かうのが日常茶飯事となりました。だから私は一年生の後半に学校で授業を受けた記憶がほとんどないのです。昭和 19 年に入ると空襲の数が益々頻繁となり、洞穴から家に帰ってくると、台所の柱に空襲を受けた時の弾丸が突き刺さっていた事もありました。その 19 年 3 月に女子供に強制引揚げの命が下り、父を残して私達が引き揚げることとなりました。

計画では大型客船のアメリカ丸と小型の半軍艦サントス丸の2艘がこれにあたり、アメリカ丸が先に出港すると言う計画だったらしく、母は、南洋庁の家族はほとんどアメリカ丸に乗船だからとはじめその手続きを取ったらしいのですが、どうしても荷造りが間に合わないと知り、後発のサントス丸に乗船するべく手続きを変更したのだそうです。そうした所、急に2艘が同時に出港することとなってしまい、荷物はほとんど置いて父が後で送ることとし、サントス丸に乗って出港したのだと語っていました。2艘は毎日ほとんど並行して航行し、サントス丸は客船ではないので甲板下のスペースに救命胴衣をつけたまま寝起きしていました。他の人々はほとんどが船酔いに苦しんでいましたが不思議に私の家族（母と姉妹と弟、それに私の5人）は船酔いに苦しむことなく航海を続けていました。ところが、出港して4日目の早朝、ドカーンと言う猛烈な爆発音に飛び起き、母に手を引かれて甲板に登った時には、毎日すぐ隣りを航行していたアメリカ丸の姿は影も形もなくなっていました。すぐに私達の乗ったサントス丸の横をかすめて魚雷が走ったそうです。今想えば、アメリカ丸からサントス丸に乗り換えた運、魚雷が後から発射された運、この2つの幸運によって今私はここに生きているのです。

その年昭和19年7月サイパン島玉砕、当然父は帰らぬ人となりました。しかし後日談があるのです。終戦後、しばらくたった或る日一人の青年が我が家を訪ねて来られました。千葉に住む小林と言う方でした。その方はサイパン郵便局の職員として父の部下だった方で、激しい戦いの中、47歳の父を庇いながらバンザイクリフの近くの海岸までたどりついたのだそうです。昼間は物陰に隠れ、夜になると小林青年が水と食糧の調達に走り廻り、二人で玉砕の少し前まで逃げ延びて、これ以上は逃げる場所がないと言う崖下までたどり着いたのだそうです。そこで父が小林青年に向って、「君はまだ若いので体力もあるから、ここからテニアンに向って泳ぎなさい。」と命じたそうです。サイパン島からはテニアン島が、丁度、静岡から伊豆半島が見えるように見えているのです。しかし艦砲射撃を繰り返す軍艦が取りまいていたとの事です。それでも父は、衣服は頭にしばりつけて沖に向って泳いでいくように指示をしたそうです。父は「自分は手榴弾を持っているから、この場で自決するから、君だけでも助かってほしい。」と懇願したそうです。命ぜられるままに小林青年は海に入り泳いでいる所をアメリカの軍艦に拾い上げられ、終戦後、日本に帰されたと言って我が家を訪ねてくれました。その結果父の行動のほとんどを知るところとなり、母はサイパン島を訪れ、当時我が家で女中さんとして働いていた現地人

のカヨ子さん（この方は戦後グアム島で看護婦さんをしていることがわかっており、母とは文通をしていた方でした。）の案内を得て、霊をなぐさめる旅を実現出来ました。私は後になって考えるのですが、小林青年に泳ぐよう命じた時、父は、小林青年が敵艦に見つかり捕虜となれば助かることを見抜いていたのではないかと思いました。ではなぜ一緒に泳がなかったのかと思った時、当時の「戦陣訓」に「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪科の汚名を残すこと勿れ」としっかり指導されていたのだと思います。ともあれ、戦争によって、天国と地獄を見ることとなりました。

苦しみ抜いた戦後の生活、ことに自分の歩んだ数々の経過については後日談にゆずることといたします。

戦後 76 年を経過し、戦争を知らない日本人が 80%以上となる時、改めてユネスコ憲章の前文にある「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心に平和の砦を築かなければならない」と言う言葉を自分の心に語りかけ続けなければならないと思っています。

出征兵士　「住吉の浜」にて送る　　吉田町遺族会　松浦太一朗

先の大戦から、戦後 76 年に成りますが、今でも、極めて悲惨だった小学生時代の、世界第二次大戦の頃が思い出されて、忘れる事はありません。

小学生の頃には誰もが楽しいことが、数限りなく有ることを信じて居ましたが、何一つ叶いませんでした、誠に残念でなりません。

其れにつけて思い出されるのは、母親の苦労をつぶさに見て来た頃が、忘れようと思って居ても忘れる事は有りません。

父は遠洋漁業に出ていましたので、家に居る事が少なく、父親の印象は記憶がおぼろで、はっきりとした想い出は多く有りませんが、大戦の初めから終戦、そして戦後と、子供心にも厳しい生活だったと記憶しております。

それよりも尚、母親の苦労は筆舌に尽くせない苦労の連続でした。家族の為に寝食を忘れて、父の留守を預かるその苦労は子供として忘れては成らない記憶の一つです、それと併せて、父の出征の頃が走馬灯の様に私の胸をよぎります。

父親が第二次大戦に出征致しましたのは私の、小学二年の 1 月 31 日でした。

我が家は、先代より漁業に係わって居りましたものですから、軍属の戦闘員として、父親の生まれた海辺から、戦地に向け出征して行きました。

出征兵士達が出征した後で、15・6 歳の少年が二人、供に出征しましたので

その二人の少年の事を思うと胸が張り裂けそうになり・・・必ず帰って来るんだと！、何度も子供心に思ったことか、併し、遂に最後まで全員還ることは出来ませんでした。・・・そして。

兵士を送るその浜辺には、夕闇が迫り、兵士の家族、又関係者一同、その他大勢の人達で、見送る人、人の波で「住吉」の浜は歓呼の声で埋め尽くされて居りました。

そして、その浜辺で父親を見送ったのが最後で、今生の別れと成ってしまいました。

その当時の浜辺の様子だけは 76 年経った今でも、私の瞼の底から離れる事は有りません、そして歓呼の声が響く中、本船は少し沖合いで錨をおろして居りましたが、兵士達が小舟に乗り込もうとした時、波打ち際に少し大きな「亀」が磯に上がろうとして居りました、それを見た見送りの人達も可愛らしさも有ってか、海辺が賑やかになり、兵士を送ることを束の間忘れかけて居りましたが・・・それが出征した兵士達との最後でした。

思い起こせば数限りなく思い出は尽きませんが、現在の今、其の頃を思い出せば、口には表せない事が無数によみがえってきます。

あるときは、タンスの隅で母親が時々目頭をぬぐって居る時も有りました。其の頃の小学生では自分には何故だか、分からなかったのですが、成長する事によって、どうしてタンスの隅で泣いていたのか？・・と後で分かったことですが、父親の留守を預かる自分に周囲の目は冷たくて・・・

我が家では成人した男手が無いので、やはり周囲には可成り色々のことで母親は攻められていたのでは無かったかと、今にして、やっと分かりかけております。

今更、過去を悔やんでも致し方無いけれど、戦中、戦後と兵士達が誠を尽くした最大限の大きな心を、今に成っても、必ずや、忘れる事が有っては成らないと心に誓って居るこの頃です。

乱筆乱文で有りますが、皆様のお目に留まれば幸いです。

私の戦争体験記　あの日あの時　　川根本町遺族会　榎田　肇

今から 77 年前、太平洋戦争末期の日本軍の敗戦が迫る中、昭和 19 年 11 月 24 日、アメリカ軍マリアナ基地を飛び立ったＢ29 約 70 機による東京初空襲以来、日本各地の主要都市は空襲による甚大な被害を被ることになった。昭和 20 年 3 月 10 日未明の東京大空襲では 334 機のＢ29 による夜間低空焼夷弾攻撃で

大被害を受けた。

そして同年 5 月 29 日（二番茶の時期）横浜に空襲攻撃を仕掛けるため、B 29 爆撃機が御前崎沖より富士山を目標として、現在の川根本町、合併前の旧上川根村千頭、旧東川根村小長井の上空を数えきれないほどのB 29 爆撃機が低空飛行してきた。これ以上の被害を出さないために名古屋の飛行基地から、土山茂夫兵長の操縦する零式艦上戦闘機（ゼロ戦）が離陸した。

果敢にB 29 編隊に対し攻撃を加えるも、その戦闘力の差は大きく、万策尽きた。

土山兵長は玉砕覚悟の体当たりをB 29 編隊の最後尾に敢行した。一瞬閃光が走り、B 29 の胴体は真っ二つ、火の玉となり地上に落下。その時ハッチが壊れて開き、大量の焼夷弾と共に、二人がパラシュートで脱出した。少年兵飛行士はその後捕らえられ、憲兵が浜松に連行。その後の二人の消息は不明。

日本の飛行機（ゼロ戦）は青部の山中に墜落戦死。また大量の焼夷弾は、千頭の清水館、森平の山本宅、小長井の芹澤宅、数軒の家に落下し、火災発生。のどかな村をパニックに陥れた。

墜落した機体の一部は、森平の山中（コックピット）、エンジン部分は学校の校庭、胴体は平栗の山中、付近の山林には機体が散乱した状況。それでも親切な住民達は、墜落し亡くなられた搭乗員数名の遺体を丁寧に扱い、現在の忠魂塔の片隅に供養し、冥福をお祈りしました。その後、遺骨は掘り起こしてアメリカ軍が持ち帰ったとのことでした。

その後、不幸な出来事が小学六年生絵画の時間に襲い掛かる。それは、好奇心で少年達数名が、万年筆の様な不発弾を扱っている最中、突如大音響と共に不発弾が炸裂。一人の少年は眉間に穴があき即死の状態。もう一人は片目に破片が突き刺さり失明。数名は爆風と共に土平（どべら）よりころげ落ち、大怪我したものの、命には別条なしとのこと。この様な事件も戦争の犠牲者なのかもしれません。

平和の尊さを後世に伝える　慰霊巡拝に参加して

浜松市遺族会　大石紘司

私は終戦 3 年前、昭和 17 年生まれ。父は私が二歳の時出征し、フィリピン、マスバテ島にて 33 歳の若さで戦死しました。私は父の顔を知りません。

当時、姉は 6 歳、妹は生まれたばかり。父はさぞ、戦況の厳しい時世とはいえ、家族を心配し、後ろ髪をひかれ出征したものと思います。母は 20 代で戦

争未亡人となり、苦労に苦労を重ね、私達（兄姉妹）3 名を立派に育て成長させてくれました。感謝あるのみです。

立派な母でした。その母も 13 年前に父の元へ旅立ちました。

私は、日本遺族会主催による「フィリピン慰霊友好親善訪問」に参加する機会を得ました。

父は 19 年 11 月 24 日朝、レイテ島上陸を目前に敵機に発見され、グラマンの攻撃を受け、応戦するも一弾を艦の中央部に受け、満載した爆薬、弾薬に引火し大破炎上、隊長以下 34 名と共に戦死と聞いています。マスバテ島の山中に埋葬されていると思います。

お国の為に戦って亡くなった父を誇りに思うと同時に、父のことはずっとこの胸から忘れた事はありません。当時の生々しい出来事が、実際に戦没地を訪れ、万感胸に迫り感無量でした。私達は、この不幸な歴史を深く心に刻み、平和と安全、そして自由と繁栄を享受している事を改めて心に噛みしめ、「国家が平和でなければ国民の幸せはありません」、あの痛ましい戦争を風化させず、平和の尊さを後世に伝えていく努力が必要です。（恒久平和）

祖国の礎になった246万柱の英霊の犠牲の上に築かれていることを決して忘れてはなりません。

比島戦跡巡拝団に参加して　　浜松市遺族会　小倉てい

私は 43 年、日本遺族会の比島戦跡巡拝団に加わり、20 数年前、私共の肉親が踏んだであろうこの土を、夫の最後の地を確かめに来ました。

このバナナや椰子の果物がたわわに実る平和な島にかっての激戦があり、栄養失調で亡くなった多くの方々に対して、何とも言えない気持ちが一杯で、唯々内地より持参の好物を供えて冥福を祈るのみでした。大きな声で夫の名を呼んでも、空しくこだまが返って来るばかり・・・小石を袋に一つ、一つ、涙の跡を残してミンダナオの形見として持ち帰り、遺族の方々にお分けして、共に泣いたものでした。

今まで日本人の墓らしい物も無く、全く惨めな思いでしたが、再び訪れた昭和 48 年、ルソン島カリラヤの地にマルコス大統領のご厚意で慰霊碑が出来上がりました。この時、浜松市長さんにお願いし、浜松出身の全比島の戦没者名をお書き頂き、お花と共に墓前に供えて、謹んでご冥福をお祈り致しました。

台湾慰霊行

浜松市遺族会　井村俊一

「時は、すべてを恩讐の彼方へ流し去れり。いまは只、真蒼なる、バシーの海にねむれる　幾多の御霊安かれと、安かれとこそ祈るなり」

この碑文は、台湾の最南端に近いバシーの海を見下ろす貓鼻頭（ビョウビトウ）に新しく建てられた戦没者慰霊堂前にある、観音座に書かれたものです。

私は誠に適切な文句だなと思いながら、み霊のご安泰を祈り続けました。

澎湖島から比島へ向かう日本船団はどうしてもこのバシーの海を通らねばならなかった。敵の大抵抗をくぐって比島に向かう多くの船は敵の魚雷や爆撃を受け爆死する者、海に飛び込む者、船と運命を共にする者、その数を知らず、悲壮そのものでした。

現地の方の話によると、戦争当時は、バシー海岸一帯は、多くのつわ者共の屍が打ち寄せられたとの事、さもあらんと思いました。

バシー及び台湾方面でお亡くなりになった勇士の在りし日の面影を偲びながら、心ゆくまでのご冥福を祈り続け、ご安泰を願った。

戦跡巡拝　サイパン、テニヤン方面の慰霊巡拝の旅

浜松市遺族会　袴田きよ

かつて、数万の日本人によって開拓された製糖産業と共に栄えたサイパン、テニヤン、グアム島も、太平洋戦争によって悲惨な玉砕の島となり、20 数万の尊い生命が失われました。この地に 4 日間、6 名の僧侶のお伴をして慰霊巡拝の旅に出かけました。

珊瑚礁に囲まれたサイパンの海の色はあくまで青く、絵の具を溶かした様な美しさ。

そしてサイパン桜の燃える様な真紅の鮮やかさは、かつてのむごい戦いがあったとも思われない美しい南国の島でした。

島では数か所で慰霊を行いましたが、中でもバンザイクリフでは、立派な花々と共に内地より持ち込んだ数々の好物の品々を供えて、盛大な慰霊祭が行われました。3 万人の人々を呑みこんだこの崖、一時は海の色も血に染まったということです。一番日本に近いこの地でバンザイを叫び、祖国の繁栄を願って肉親の面影を偲びつつ、最後をとげられた方々の心情をお察しする時、胸をえぐられる思いでした。

次の日テニヤンに渡り、慰霊祭を行ないましたが、戦時中そのまま、草ボウボウ、ジャングルは生い繁り、山は艦砲のためその形も変わってしまったとい

う激しい砲撃の跡。陸海軍本部も無残な残骸をさらして、戦いがいかに空しいものであるかを物語っていました。四本の滑走路はジャングルの中にそのまま残され、日本の敗戦のきっかけとなった原子爆弾の地下貯蔵庫の跡も記念碑が建てられており、当時の日本軍の日の出神社は朽ち果て、哀れみを誘っておりました。

昼食をとり数々の珍しい食物を頂きながら、兵士達の口にはこの一かけらも入る事はなかったことだろうと思うと胸の詰まる思いでした。

もし事情が許したら、一度は肉親の最後の没地におでかけ頂きたいと思います。

戦没者の御冥福をお祈り致します。

歌集「ルソンの小石」より　　**浜松市遺族会　栩木淑子**

送り来てひとりの室に軍国の妻の覚悟を日記にしるす
命あらば遂にまみゆる日もあらむ庭の梧桐葉音立てて落つ
英霊を負ひて生き来しわが生も子ら育ちゆき虚しきか今
灌木と羊歯原つづく山脈に憚らず呼ぶ亡夫の名久に
山奥に餓死せし事実疑へず怒りに耐へて我は祈りぬ
ルソンの小石遺族らに配りくり返す巡拝談も板につきたり
比島山麓の墓標にと蒔きて来し朝顔は如何なる花をつけしや
戦争を知らぬ世代とかみ合わず嘆くが愚かか我ら遺族ら

「さくら散る日に」

・背丈大きくすくすくと　一人一人が君に似て　いと頼もしく育ちたり
　皆のやさしき心根に　守られまもる楽しき我が家
・さくら散る日に靖国の　みたまに詣で語らいぬ　荒き波風今日も越え
　高きいさおしたたえつつ　栄ある祖国築かんわれら
・とつ国々の果てまでも　平和の光輝きぬ　自由の花は咲き匂い
　生きる喜び充ち充ちて　今こそ仰ぐ靖国の神

わが町の慰霊祭　　**浜松市遺族会　友田　宏**

毎年、秋の彼岸日になるとわが町では戦没者慰霊祭が行われる。空襲で受難された霊も一緒に追悼される。神社の境内で式典が準備される時、風が吹き鎮守の森は騒めき霊感を覚える。亡き人々の懐かしい面影が浮かんだ。少年兵だった霊魂は早くから梢に止まり式を待っていた。

慰霊碑の前に御供物が並べられ、御詠歌を捧げる老婆達が「般若心経」「靖国和讃」の教本を手にして正面に座すと、騒めきが鎮まり式が始まる。自治会長の挨拶が心静かに述べられる。昭和 40 年以来引き継がれる『わが町の英霊』に捧げる言葉である。黙祷に頭を垂れる遺族の胸中は彼岸の日の仏門を想う。亡き人を英霊と呼び、神となりしが。母は、妻は、果して我が子が、わが夫が、仏の世界で迷いを脱し、悟りの境地にはいっているだろうか・・・神仏混こうただひたすらに哀惜を追う。

戦後の一時、戦没者を慰霊する行為を戦争に結び付けると考え、タブー視された時期がありました。戦争の悲惨さを一番強く浴びたのは戦没者とその遺族でありましたのに。世情は薄情にも悲しみの遺族をあたかも戦争協力者であったかの如く冷淡にみて拒んだ。

わが町の有志は、そんな時代の風潮の中で氏神境内に慰霊碑を建立、そして毎年秋の彼岸日には町主催の慰霊祭を取り決め行っている。町は政治や思想に全く関係ない立場で施行する。

あの大戦中、町の若者は次ぎ次ぎ軍に召集された。

ある壮者は「我々は町の代表として来攻する敵を撃破、立派にご奉公を務めて参ります」と神殿に誓った。これに答えて「銃後の守りは心配するな」と町民が挙って見送った。そのわが町の勇士らは、数か月後には輸送船上で敵潜水艦に襲撃され海没したと云う。

又健気な若者は南洋の島で壮烈な戦死を遂げた。妻子を持つ兵士は酷暑のジャングルの中でさまよい飢えと救いを祖国に求め、郷愁に涙を流し息絶えた。シベリアの寒地や中国大陸で眠っている者もいる。総てが戦禍がなした非業の死であった。

わが町の戦没者　54 柱、空襲受難者　5 名　の尊い犠牲をいつまでも忘れずに追悼する。

国破れて山河在り、英霊たちを追悼する人も年々減り淋しくなりつつあります。昨今、わが町では純粋な真心で郷土戦没者の慰霊顕彰を心掛け、正しい史跡を後世に伝え残さんと「碑」を護持している。その精神は戦争への警鐘と平和への願いが秘められている。

戦中戦後の労苦　夫亡き後、

子供の寝顔に　負けられない！　　浜松市遺族会　館つる

昭和 18 年、寺の住職であった夫は赤紙、召集令状を受け、出征して行きました。14 歳を頭に末は乳飲み子で、5 人の子供を抱えて苦悩の日々が始まりました。寺の留守を守る私は収入源を断たれ、日常生活は一変。慣れない農作業や土木工事の日雇に出たり、野菜の引き売り等、その日の糧を得る為に朝は三時起き、寝るのは 12 時まで、働きづめの毎日で生活を支え、暮らしも大変でした。

災難は追い打ちをかけるように、昭和 18 年 5 月 19 日終生忘れられない恐怖の日でした。それは浜松方面へのＢ29 の爆撃により、寺の本堂、庫裡（くり）に至るまで屋根と柱を残すのみで、建具、家具、ガラス戸等が吹き飛び、大きな被害を受けました。一時は呆然とし、なすすべも忘れ、何から手を付ければ良いのか気抜けし途方に暮れる毎日でした。

気を取り直し、残った柱に拾い集めた戸板やむしろで囲い、雨露を凌ぐ急場の生活を始めました。しかし、その翌年本当に悲しい知らせが届けられました。それは夫の戦死公報です。無事の帰りを固く信じていた私は、口では言い表せない衝撃であり、もう半狂乱、その場に大声で泣き崩れ落ち身動きできませんでした。

気を張りつめ頑張り続けた気持ちも砕け、何度か子供を道連れに死を考えました。しかし、子供達の寝顔を見、将来に思いを馳せ、これではいけない駄目だと、負けてはおしまいだと気を取り直し、全身全霊、歯を食いしばり懸命に働き続け、今日まで生き延びることが出来ました。

更に長男が亡くなり、重ねての悲しみはありましたが、他の子供達は何とか健在で成長し、幸せな日々を過ごさせて頂きました。

長い年月を振り返り、戦争の悲惨さ、苦しみ、悔しさ、情けなさ等、体験から多くを学びました。

他人に対する思いやりと報恩感謝の心を身につけさせてもらいました。しかし、「こんな時」「あんな時」夫がいれば、「お父さん」がいればと何度思ったことか数えきれません。「嗚呼、お父さん」「嗚呼、お母さん」とある時は声を出し、ある時は心の中で小さな声で叫び願いました。そして尽きない願い、二度と戦争はしないで、戦争はやってほしくない、戦争はやらないで下さい。

「　合　掌　」

父との思い出とフィリピン慰霊巡拝の旅　　浜松市遺族会　川合康彦

私は終戦当時、小学校六年生でした。空襲や艦砲射撃等を実際に体験しました。

父は逓信省の職員であった。業務に精励され、電話の自動交換機改良により逓信大臣表彰を受けました。その時の金一封をそのまま陸軍省に寄付、当時の東条英機陸軍大臣から署名入りの感謝状を受けました。金一封を自分や家族の為に使うこともできたはずだが、厳しい戦局にあった日本の為に役立てて欲しいと考えたのではないかと思います。

中国への長期出張の際には、家族にお土産を買って帰ってきました。人として、又父親として大変立派で、常に周りの事を考え、接してくれました。家族は皆、心から尊敬と誇りに思っていました。

父は昭和 20 年 5 月 11 日フィリピンルソン島「ヌエバビヤヤサラトレ」にて戦死。

愛する妻や子供を残し異国の地に赴くのは大変辛く、やるせない気持ちであったと思います。しかし、祖国、家族を守る為に、男として自分が戦わなければならないと、自ら志願し、通信技手として従軍する。敵地に向かう輸送艦が敵の攻撃により沈没、溺れて亡くなる兵隊さんが多い中、泳ぎ続け、島に辿り着くことができた。上陸後は、第 14 方面司令軍の指揮下にてフィリピン全島の電気通信業務のため各地に分遣された。その後次第に各所で友軍の敗北が続き、憲兵隊と共に行動していたが、ラトレの地で戦死。昭和 21 年 2 月戦死公報が家族のもとに届いた。

定年退職後、日本遺族会の慰霊友好親善事業に参加させて頂きました。初の海外旅行でした。以前にも海外へ行く機会はありましたが、まずは父の眠る戦地で慰霊をしなくてはとの思いが強く、海外出張には行かなかった！。訪問では各激戦地での慰霊祭の他、現地の小学校への親善訪問があり、小学校へ行きました。出迎えてくれた校長先生が日本語で「愛国行進曲」を歌ってくれた。北部地方は早い段階で日本に占領されており、穏やかな統治がされたため親日的な人が多い。校長先生との会話の中で、日本軍憲兵隊司令部の跡地について伺うことができた。古いスペイン風の大きな邸宅だが、一部が爆撃で破壊されたままになっており、戦闘の激しさを物語っていた。父はこの地で戦死されたのではないかと・・・。実際に戦没地に立ち、慰霊できることは稀で、亡き父が呼んでくれたのではないかと思い、心ゆくまで積年の思いを伝え涙しました。

現地の人は、戦後米軍は遺骨収集に来たが、旧日本軍はまだ来ていないと言

っている。現在も遺骨収集活動は続いているが、いまだ多くの遺骨が、日本に帰ることなく遠い異国の地で眠っている。祖国を守る為散華された遺骨が忘れ去られ、放置されたままになるような事があってはならない。英霊を忘れ去る事は、日本の歴史や日本人である事を忘れる事に等しく、このままでは日本人が日本人でなくなってしまう。

英霊の御霊が祖国のない亡霊にならない為にも、国は全力を挙げ遺骨収集事業に取り組むべきである。そして、国民も英霊への感謝と尊崇の念を持ち続けることが大切です。

出征前夜日章旗を母に託す

父との思い出と戦没地への慰霊に参加して　浜松市遺族会　鈴木利協

父は昭和 19 年 11 月満州の海拉爾（ハイラル）地区に出征。翌年 8 月 13 日戦死、終戦の 2 日前です。安否が戦後八年間も不明でした。母は、ラジオの尋ね人相談や復員船の全ての港や戦友の方々に消息探しをしたものの、手掛かりは掴むことが出来ませんでしたが、昭和 28 年に戦友が知らせてくれた事にて、ようやく戦死が分かりました。

昭和 20 年に入ると首都圏も空襲が激しくなり、母は幼い私を連れ、横浜から実家の浜松へ疎開しました。父の安否不明の八年間を含め、本当に辛い時であったかと思います。母は、戦中・戦後の労苦は多くを語りませんでした・・・。

私の名前は、母が出征された夫が生きて帰って来て欲しいと願い、幸運を呼び込むとの思いから「八紘一宇」の「一宇」と名付けました。八紘一宇は本来、世界を一つの家のように平和にするの意味がある。当時は改名する事で出征した人が帰って来ると願掛けすることがあったのです。戦後「一宇」から「利協」に改名。

父は出征時日章旗を母に渡した。これは絹製の日の丸に太筆で「必勝」の文字を母の父親が揮毫したもの、「無事に帰って来て欲しい」と親族、友人、知人等大勢の方がその祈り願いを込め署名、通常は戦地にお守りとして持っていくが、「自分はもう生きては戻れない」と悟り、母に託した。子供を頼む、どんな気持ちだったでしょう！

私は慰霊友好親善事業に参加し、中国東北部ハイラルを訪れました。ハイラルは草原で身を隠すものもない所で、日本軍の掘った壕にも入ってみました。戦うための武器もなく、水や食物なく、戦病死した人が多く、「勝って来るぞと勇ましく」と送り出しても実際は、食糧、武器、弾薬もなく飢え死にという

悲惨な状況だった。戦友の方からは「決死隊に入り、散華」の文字が弔辞にはあるが、本当に銃弾に倒れたのか、確かめる術もない。父の遺骨はなく、「石ころが一つ入っているだけ」だった。

母は若い頃から短歌作りが好きで、靖国神社の広報に幾度となく掲載された。母の百歳の歌集「紅（くれない)」を編んだ。タイトルは母が自分で書いた色紙「紅」を部屋に飾っていたことから、母の古風で内に秘めた情熱を表した生き方を感じ決めた。(日の丸の色)「紅」は日章旗を託していった父のことも表しているのではないかと思う。母は百歳の長寿でした。戦死した父の分まで長生きさせて頂いた。父の分まで生きなければと頑張った。

私は父の顔も声も分からない。父親がいない、これが逆にバネになり頑張りぬいた面もある。平和への思いを次世代に語り継承する責務があり今後共取り組んでまいります。

父の望みを守った母　　**浜松市遺族会　富田健太朗**

終戦後の昭和 21 年 3 月、父親は中国、湖北省にて 34 歳の若さで戦病死しました。当時母 29 歳。長女 6 歳、長男（私）3 歳が残されました。

母親は祖父母と共に、田舎のたばこ、日用雑貨の店を営んでいました。店の収入だけでは苦しく、自転車で行商し、裁縫の内職もしていました。当時、店の仕入れの資金繰りに苦労している様子を子供ながらに感じて、欲しいものも口に出せないことも有りました。

父親は昭和 19 年南京に渡り、中国の戦地からの軍事郵便が 200 通余りあり、その中で私の母に『子供の養育に万全を期せば、お前の使命は他にない』との文面より、教育熱心になったでしょう。

進学率が高校 30%、大学 10%以下の時代、私を奨学金を受けながら、高校、大学まで進学させてくれて、父からの指示をしっかり守ってくれました。家計を切り詰めながらの生活、今思い出すと本当に頭が下がります。

私が結婚し、嫁が店を手伝ってくれるようになり、肩の荷も下りたことでしょう。85 歳を過ぎるまで店を手伝っていたと自負していました。

年を重ねるうち、娘、嫁にも先立たれて、さぞかし寂しい思いもしたでしょうが、5 人の孫、それぞれに 2 人の曾孫 10 人にも恵まれ、誕生日、敬老の日にお祝いを貰って喜んでいました。子育ての大変な頃の苦労も報われました。

最後まで大病一つせず、102 歳の天寿を全うでき、天国で親父にお疲れ様と

迎えられたことでしょう。

母に感謝、戦後の生活は・・・

お寺の奥様の一言が幸の路となる・・・　　浜松市遺族会　伊藤信吾

父母は、入野村で6帖と2帖の借家で居住し、結婚生活はたった2年でした。戦時中、父はラバウルに配属されたが昭和19年戦闘中に戦死。

戦後の生活は、空爆で爆弾を落とされた穴は長い間埋められず、大きな水溜りが池となり、子供達で住みついていた「アメリカザリガニ・・・」を捕え、茹でて食べるととても美味しかった。大きなバケツ一杯取ったことがあり、それが嬉しかった思い出がある。

父の遺骨を市役所か公会堂に受け取りに行きました。母は「白い箱」を受け取り、栄町の下がる坂の途中で「箱を抱いて」暫く泣いて動くことができなかった。今でも心に残っています。

米国軍の報復措置として「軍人恩給、遺族年金の支払い停止」があり、母は無収入となり、食材入手も出来ないので、畑を借りて「蕎麦、芋、とうもろこし」等を作ったが、役人の配給を止めるの一言で無しになりました。ある時、兄弟は芋を食べたが、母は水を飲んで腹を膨らませた・・・と言っていました。この時、母には「恩返し」をしなければいけないと子供心に誓いました。着ているものは継ぎはぎの洋服でした。

お寺の奥様からの勧めがあり、母が専売公社に採用され、人並みの生活となり、我が家の最大の転機となりました。後年母は公社近くに自宅を新築し、持ち家生活となりました。母に助言をくださったお寺の奥様の一言が「当家の幸福への曲り角」になったと私は考えております。

周囲の皆様方に感謝し、苦労した母は101歳で父の処へ旅立ちました。

遺品（手帳）より　俳句で亡き母の叫び聞き

「遺影（父）言わず、わめきたくなる　秋の暮」　　浜松市遺族会　高橋俊子

父はパプアニューギニアで戦死、27歳でした。食べ物もなく餓死でした、無念だったでしょう。

昭和19年9月30日、戦死の通知とともに空の白木の箱が届きました。母は23歳で未亡人となりました。名古屋の自宅で父の死が家族に伝えられた。かすかに脳裏に残るのは、びしゃりと閉じられた障子の白さだという。訃報が読み上げられる瞬間部屋の外に出されたのは母の優しさだったのか、知るすべはな

い・・・。当時3歳だった私の髪を切って白木の箱に納めたそうです。

悲しんでいる間もなく、空襲の激しかった名古屋から祖母の実家のある浜松に移り住み、幼子二人を抱え働き続け、ついに体を壊した母を見兼ねた人が、私を養女に欲しいという話が出たそうですが、母はきっぱりと断り懸命に私達を育ててくれました。戦後の苦労話はあまり話さず、「親が苦しんでいる時は、子供もきっと苦しんでいるのだから」と常に前向きで明るい母でした。98歳で父の元へと旅立ちました。

しかし、遺品を整理している時に、手帳に「遺影言わず　わめきたくなる　秋の暮」と母の俳句がありました。苦しい胸の内の叫び声、秘めた思いを知りました。いつ詠まれたものか分からない。それでも「父への気持ちをずっと抱えていたのですね。寂しかったんだなって・・・」

もう2度と悲惨で愚かな戦争を繰り返してはなりません。戦争を知らない世代が8割を占めております。今も世界各地で心痛むニュースが絶えません。平和を願って犠牲となった多くの英霊の魂の為にも、そして空しい戦争の悲惨さを風化させない為にも、平和の尊さを訴え続け、次世代に継承してまいりたい。

父の出征見送り「いい娘になれよ」と言い残す

戦後の母の労苦に感謝　　浜松市遺族会　新村はる枝

父は昭和19年4月21日歩兵118連隊（静岡）に召集、出征しました。私は2歳で母におんぶされ見送りました。父の顔は覚えておりません。その時、父は私の頬に手をあてて顔をじっと見ながら「いい娘になれよ」と、母に頼むと言って出征して行きました。その時の父と母の気持ちを思うと、涙があふれ出てきます。

出征後は、母と私は本家でお世話になっていました。そこへ昭和19年9月30日戦死公報が届きました。マリアナ諸島テニアン島にて戦死。

父の遺骨引き取りの連絡があり、家族は悲しみ、どうして、何で、とやるせない気持ちで一杯でした。伯父が弟の遺骨は俺が迎えに行って来るからと、私と母は、本家の家族みんなで待っていました。伯父が白木の箱を母に渡す時、死んでしまうことは、こんなに軽くなってしまうものか、と一言、涙を流しながら母に手渡しました。母も白木の箱を抱きしめたが、あまりにも軽くてびっくりしたそうです。箱の中には遺骨はなく、名前、死亡年月日、戦死場所、年齢だけ書かれた紙1枚が入っていたのみです。

母と私は、小学校六年生まで本家でお世話になりましたが、春休みになった

時、伯父から、長男が秋に結婚するので、これからは２人で生活するようにと言われました。私は、大家族のなかから出て母と２人で生活出来るのが嬉しくて、母の不安な気持ちがその時は分かりませんでした。私は中学二年生の頃、母名義の田畑、山林がある事が分かりました（本家の面倒見、気配りに感謝）。母と一緒に田植え、稲刈りと、今思うと懐かしく思い出す事ばかりです。

母は、今年９月 15 日 103 歳になります。私は毎朝、神棚にお茶とご飯を上げる時、父の遺影を見ると、父が出征する時「いい娘になれよ」と言った父が、今では「いいおばあちゃんになれよ」と言っているように思います。

今、この先どんなに世の中が変わろうと、若い人達が赤紙１枚で戦場に行く事があってはなりません。戦争のない平和な国になってほしいと願っています。そして、今の平和と繁栄は、尊い犠牲の上に築かれた事を忘れてはならないと思います。平和の有難さは永久に語り継がなければなりません。5 年前孫娘に、東京の武道館での全国戦没者追悼式にて、静岡県遺族代表（18 歳未満）として献花を供えさせて頂き、この上ない無上の慰めと無上の喜びであり、感無量でした。今後共、恒久平和につながる慰霊や顕彰を続けてまいります。

戦後を生き抜いて　母と子の労苦と親子の絆

浜松市遺族会　吉田よしゑ

戦争遺児だった主人と結婚して、はじめてその大変さを知りました。戦前戦後、日本はどこの家も貧しく、父親のいない家庭は明日のお米にも事欠いた事でしょう。お父さん（義父）がいてくれたらなあとよく思ったものです。

終戦の年に生まれた主人は、母親のお乳が出ず「棺桶」に足を突っ込んでいた子供時代でした。病弱で小学校の入学式にも行けず「いじめ」にもあいました。父親の生死も何年か後にソビエトの収容所で亡くなったとわかり、母親は両親の葬儀、亡くなった夫の葬儀と物入りな日々でした。

主人はよくご飯やおかずを一口だけ残しました。どうして？と聞くと、「明日の為にとっておく。明日食えるか分からん。」と言いました。母親は日雇いに出たり、野菜の為の下肥えを下町までもらいに行きました。朝早く幼かった主人を荷車に乗せ、途中で買ってもらったバナナがとびきり美味しかったそうです。母と子の二人暮らしは貧しくとも楽しかったでしょう。母と子の絆は強いものがありました。高校も定時制に通い親孝行な人でした。

その後高度成長期もあって印刷所を起業しましたが、下請け仕事で経営が安定する事はありませんでした。その後、ワープロが出て仕事がなくなってしま

いました。それでも主人は印刷の仕事を愛し、生涯一職工としてがんばり生き抜きました。苦労しながら共に働いた 50 年の歳月は私の良き想い出です。もうすぐ一周忌です。

戦死した叔父（幸吉）の生きた証

作文「昨夜の雨」より　　浜松市遺族会　高林幸和

この文集（作文）は仏壇の戸棚から出てきたものです。これは戦死した弟の兄（和夫）が残しておいたものと思われる。叔父（幸吉）は、昭和 19 年 3 月 5 日、パプアニューギニア、ロスネグロス島にてアメリカ軍と激しい攻防戦の末、ハイン飛行場にて戦死。26 歳でした。日本軍は、ロスネグロス島の所在人員は昭和 19 年 5 月 31 日をもって通信全く途絶し全員玉砕したものと見なし事務処理したと、防衛庁の戦時業書に記載されている。アドミナルテイー諸島ロスネグロス島での戦いの戦力は、アメリカ軍部隊 45,116 名、日本守備隊 2,615 名（歩兵 229 連隊戦死者 384 名）であった。

文集は積志尋常高等小学校・積志の葦第 12 号・発行昭和 5 年 12 月 20 日、

尋常六年生（12 歳）・「昨夜の雨」高林幸吉

だんだん夕方になって来た。僕はうちの手つだいをしていた。そのうちに雨が降りだした。ぴかぴか光った。ごろごろなりだした。びっくりして外へとびだして又とびこんで、お父さんに「雷がだんだんひどくなったのう」というと「この前もこんな空になって通りものがしたが、今日は通らねばよいが」といった。うちの子供はおっかないといって蒲団の中へもぐっていた。そのうちに雷がだんだんひどくなってきた。「西の方があんなに赤い。あれはひやうが降るしるしだ」と兄さんがいって戸をしめた。お父さんは煙草をかたずけるやら、お母さんは水をくみに行くやらで、僕の家はたいへんな騒ぎである。

雨は次第しだいに強くなってきたが雷は少し静かになったようだ。外へ出て見ると、空には黒い雲がある。家の中へ入って、夕食をすまして外へ出た時にはもう日本晴れであった。僕は思わず「ああよかった」とさけんだ。ぢきに床についた。夢にも雷のことを見て心ぼそかった。

当時の高林家の様子が良く表現されている作文と思います。

昔より長期にわたり品質の良い評判の煙草作り農家であった事を思い出しました。高林家の貴重な記録（宝物）として保存し、残してまいります。

又この他には戦地からの手紙があり、それには、故郷の秋風で一杯の黄金に輝く、田んぼの風景を偲ぶとともに、家族、親戚の人達への思いが込められた、

とても一口では表せられない人情が深くつづられていました。

モンゴルへの遺骨収集派遣に参加して

「その靴の中にご遺骨・足の指の骨５個…発見」

浜松市遺族会　竹内　治

平成 22 年、比国（フィリピン）において遺骨収集によるある事件が発生しました。比国政府により遺骨収集の許可は出なく、中止、中断されたままです。太平洋戦争最大の激戦地の比国での遺骨収集の目途は立っておりません。そのような中、私は翌年モンゴルへの派遣が決まり、8 月 22 日から 17 日間行くことになりました。

モンゴルのスンベル村、ここはノモンハン事件から始まった第二次世界大戦の戦場です。ノモンハン事件とは昭和 14 年 5 月から 9 月にかけて、モンゴルの最東部、中国の西部に位置するハルハ川を挟んでの国境紛争の戦場です。日本軍対モンゴル軍・ソ連軍との軍事衝突です。日本側はノモンハン事件と言いますが、戦死者双方で 18,000 人余・戦傷者は 25,000 人を上回っており完全な戦争です。どちらが仕掛けたかは今もってよく分からず、兵士の自殺者や行方不明が多いのもこの戦争の特徴です。

8 月 24 日現地にて行動開始、まずはモンゴル日本人慰霊碑参拝、日本大使館訪問、現地説明を受ける。先ず医者なし、ホテルなし、食堂なし、水道なし、電気は中国から輸入時々停電、風呂、シャワーなし。夜は非常に寒い、ベッドは木製で毛布のみ、冬物を着て寝る。我々の宿舎は四人部屋、戦勝記念館です。食料は日本から持ち込んだ物を毎日変えて食べる。連日調査、試掘を繰り返すが手掛かりなし、遺骨が見つからない。

8 月 29 日、今日も午前中手掛かりなし、午後になり 3 時 30 分、755 高地付近にて遺骨、歩兵銃と一緒に出土する。色々な物が出る。先ず錆びたボロボロの歩兵銃、鉄の部分しか残っていない銃剣、革製の馬具、水筒、マッチ、石油缶、鉛、鉛筆、カミソリ、革靴、小銭入れ、ビール瓶、歯ブラシ、銃の弾、ボロボロの日章旗、旗白地は黄色に黄ばんでいる、そして「靴」。

その時、その靴の中に**「足の骨」**があるかもしれないので、良く見て下さいと言われ、はっとして中を探ると骨があります。足の指の骨です。指の骨五個そして踵。なんと**「七十年」**もの間ここに居たのです。悲しいと言うのを通り越して、よくもまあこんな姿でと、ただただ呆然としてしまいました。この怒りをどこに向けたら良いのか、土の上に正座し只々頭を垂れお祈り、口の中で

静かに語り、手を合わせ、人の愚かさ、醜さ、こんな辺ぴな所に、早く迎えに来れなくて御免なさい、さあ帰りましょう。

収集したご遺骨を宿舎に持ち帰るために、白い布製の袋に入れ、袋に書きます。「H22・8・29 午後、東バルシャガル、755 高地近く（ＧＰＳにて地点割り出し記録）全橈骨（ぜんとうこつ）、仙骨（せんこつ）、背骨、腕骨、臑（すね）の骨、足骨」。記録を終えて、その場で声を出して呼び、叫び、お～い、お～いと大声で私達と一緒に帰りましょう、迎えに来ましたので出て来て下さい、お願いしますと叫び続ける。この戦場は若き田中角栄元首相も一兵卒として参戦したノモンハン事件の戦場です。「父親も比国のルソン島バギオで戦死、未だに遺骨も遺品も何も帰って来ていません」遺骨を入れた白い袋を胸に抱き宿舎に帰ります。父親を抱いた気持になって無言の内に宿舎へ、そしてご遺骨を安置し、拝礼をし一日が終わります。

その後、何か所かを試掘調査、この日地中よりボロボロの地下足袋が出土。見ると「月と星のマーク」です。現在の月星化成の製品です。缶詰やビール瓶と一緒に出て来ました。日本に持って帰り、月星化成本社に送りましたら、本社に昭和 10 年代の物は無いとの事で、月星化成記念館に「ノモンハンの戦場で見つけた地下足袋のこはぜ」として展示してあるとの返事がありました。

9 月 2 日焼骨式。焼骨、慰霊祭、追悼式、骨上げ、残骨をハルハ川に流す。

9 月 6 日気温 2 度、ウランバートル空港から日本へ、午後 2 時成田空港着、気温 32 度、熱い、暑い。空港から専用バスで宿舎へ。ご遺骨を胸に抱き、語りながら、これが日本の東京ですよ、日本の生活はこのように豊かになりましたよと話しながら、翌日、厚労省にて遺骨引渡し式、厚労大臣より労いの言葉、日本遺族会で解団式、解散、遺骨収集の旅は無事終わりました。

戦後 26 年ぶり無言の帰郷（遺骨我が家へ帰る）

父との約束を果たすため戦中戦後、激動の中を生き抜いた母の労苦

浜松市遺族会　大石　功

父は昭和 19 年 6 月臨時召集を受け、横須賀海軍海兵団に入隊、その後霞ケ浦海軍航空隊、松島航空基地隊にて基礎教育を受け、9 月母島海軍警備隊に配属。9 月 26 日盛安丸（輸送船）にて横浜港発。10 月 6 日父島着後、第 7 号輸送船にて母島着、入隊。任務に当るが昭和 20 年 8 月 15 日戦死（終戦の日）。その後戦死公報が届く。

出征後、私達家族は空襲が激しくなり、町中より田舎へ仮疎開するが（母の実家）、戦死公報が届くやその生活は一変。幼子を抱え、女手一つで母の労苦

は並大抵ではなく、「死にもの狂い」で育て、筆舌に尽くし難い。波瀾万丈、多事多難を乗り越える克己献身的な母の生き抜く強い信念と耐え忍ぶ背中（姿）は凄まじく、その形相は脳裏に焼き付き忘れません。いつも口癖、「いつまで有ると思うな親と金」・・・「親思う心に勝る親心」でした。

生活の糧として、母は畳一帖程ある「箪笥長持」より呉服（反物、着物、羽織、帯）を一枚二枚と交換しつつ、働き通しの毎日であった。父との約束は「子供を頼む」「体に気を付けて後を頼む」でありました。常に「子供は二十歳（成人）まで育てるのが私の責任。あと「外部」は自力で切り開いて行きなさい」、自らの使命、責任を全て遣り遂げ、将来を見据え、見届けるや急逝。40 歳代半ばで旅立ってしまいました。早く楽をさせたい気持ちで一杯の中、突然でした。不思議なことで、その朝出掛ける時、常に言ったことはない「・・・ごめんね」が最後に交わした言葉でした。大切に胸に秘めており、感謝の一途です。

光陰矢の如し、4 年が過ぎた昭和 46 年 6 月、東京都小笠原村母島評議平にて父の遺骨発見の報があり、関係先に確認をし、間違いないと連絡を頂きました。国、東京都、静岡県、市と関係者皆様方の丁重なるお運びの中、我が家へ帰還致しました。改めて葬儀を行う。当時、報道各社の取材は凄まじかったです（ＴＶ小川弘モーニングショー等々）。しかし、その場に母の姿はなく、遺影となりお迎えでした。骨壺一杯のご遺骨を一目見、胸に抱かせてあげたかった。申し訳なく残念でなりませんでした。写真でしか知らない私は、言葉が出ませんでした。家族と迎え、母（遺影）は仏壇の上より、優しい瞳より涙に溢れる香りが漂っていました。その夜は満天の星空。遠いはるか彼方より相見合わせ眺めているようでした。

〇小笠原村母島評議平における遺骨収集に関し記載させて頂きます。

母島における遺骨収集作業の経過及び

海軍母島警備隊戦没者仮埋葬地の状況等について

昭和 43 年 6 月、小笠原諸島返還早々、当時従軍した部隊関係者、遺族又は旧島民らに埋葬状況の情報提供と早期収容の要望があり、国に連絡する一方、東京都として昭和 44 年 10 月から現地調査を行い、情報による埋葬場所の確認を行ってきた。昭和 45 年 1 月国より遺骨収集事業の委託を受け、現地調査を実施する。昭和 46 年 6 月母島評議平仮埋葬地の発掘作業を実施。55 柱（氏名判明 46 柱）を収容。7 月東京都戦没者霊苑にて、遺族、部隊関係者参列のもと追悼式を挙行、遺骨の遺族への引き渡しを行った。

母島は、東京から 1,100km、父島から 50km 船で 3 時間余りのところにあり、

緯度は沖縄より南に存している。面積は 21 ㎢である。当時、母島に島民は居住していない、無人島。島は 26 年の歳月が、島内を完全に熱帯植物が密生するジャングルと化し、当時の面影は全く見られない。仮埋葬地の評議平は海抜 90m 前後の高台の地形で、当時は海の見える見晴らしの良い所であったと思われる。

埋葬地に通じる道は、土地測量のため切り開いた山道しかなく、灌木が生い繁り歩行は極めて困難である。仮埋葬地の広さ 25m×40m 程あり、84 基の墓石が整然と列んでいる。灌木が密集し墓石は完全に覆われ、偶然一基の墓石を発見したことから、周囲を伐採していくうちに、次々と墓石が現れて、その全貌を掴むことができた程で、母島における仮埋葬地の発見は極めて難しい。墓石は現地ロース谷から採れる大谷石に似た軟らかい石でできており壊れやすいが、碑銘は立派な字体で完全に読み取ることができる。

当時の入口には、左側に「日本海軍墓地」、右側に「昭和 20 年 8 月 15 日着工 12 月 15 日竣工」と記入された石柱が建てられている。終戦までは木標であったが、戦後設営隊の技術者が刻み、石碑を建て整備したのである。評議平は警備隊本部や防空砲台が散在していた所で、今も高角砲が砲身を空に向けて立っているのが、戦場であった当時の酷しい情勢をしのばせている。

旧島民の帰郷に合わせ、姉と共に仮埋葬地を訪ね、思いの丈、積年の思いを語り尽くしました。色々な思いが走馬灯のように浮かび流れ、万感胸に迫り感無量でした。

合　　掌

次世代に語り継ぎたい遺族の体験　　**浜北区遺族会　岩崎伸次**

1945 年 6 月 18 日未明、浜松大空襲が始まった。数十機の B 29 による焼夷弾爆撃で、浜松市の中心部はほぼ壊滅した。死者 1,157 人。

当時はまだ幼かったが浜松大空襲を体験した男性に聞く。

東側の窓ガラスが明るく、真っ赤に染まっている。僕は一瞬、火事だと思った。「火事なの？」と母に聞いたが、母は答えず、僕の手を引っ張って戸外へ出た。

我が家から数十メートル先の斜面にあった防空壕に入ると、中にはすでに大勢の人たちが入っていた。中の方からガヤガヤ話し声が聞こえる。もちろん、中は真っ暗だった。

自宅で聞いた「ドーン、ドーン」という音が、次第に近づいてますます音が

近く、大きくなった。この防空壕の近くにも、爆弾が落ち始めたようだ。

壕の奥の方から盛んに、念仏を唱える声が聞こえる、その夜は、いつまでも爆撃の音が鳴りやまなかった。防空壕の中は、人がいっぱいで座ることも寝ることもできず、立ったまま一夜を過ごした。

壕の外へ出ると、辺りは早朝の薄暗がりに包まれていたが、見渡す限り、全くの焼け野原であった。煙がくすぶっていた。

その後、中瀬村（現浜北区の北東部）の親戚に疎開して行くことになる。中瀬村でもアメリカの艦載機に襲撃された日本の輸送機が、私の家の 300m 南東の河合家の庭に落ちてきたり、銃撃されたことをよく耳にした。又、大空襲の時は浜松の方角が真っ赤に見えたと聞いた。

戦没者の家族としての体験と思い　　掛川市遺族会　名倉　武雄

私が生まれたのは昭和 16 年 10 月、太平洋戦争開戦の 2 カ月前です。父は昭和 16 年 8 月充員召集、横須賀海兵団に入隊、私が生まれた時、父は開戦の事は知らされないまま、戦艦五州丸の機関兵として（後で分かった任務　南洋隊航空部隊特務隊員、ウエーキ島・ラバウル方面攻略）太平洋を南下していたものと思われます。

その後、昭和 17 年 7 月横須賀に一時寄港、この時初めて父と面会した事になっているが、一歳の子供に何の記憶もありません。父とは後にも先にもこの一度だけの対面でした。

父は、昭和 21 年 1 月オーストラリア軍の捕虜として収容されていたブーゲンビル島で赤痢・マラリヤ等により病死、その事実を 1 年後の昭和 22 年に町役場から知らされました。

遺骨はなく、白木の箱だけで帰ってきました。

その後、葬儀の香典帳の最終頁に母の思いが記されています。

父　死せし時　長男　武雄　6 歳　長女　英子　8 歳　妻　初江　30 歳

「葬儀する　妻の心は一つじに　吾も一所に　夫と行きたく」

「吾子二人　如何なる事が有らう共　吾身にかへて　守り通さん」

私の戦争前後の記憶

＊終戦間近に、アメリカ軍が浜松市街に向け艦砲射撃を行い、空まで真っ赤に染まり、怖かった。

＊西の空から B 29 が大きな翼を広げ、上空から自分を睨み付ける様な威嚇した飛行編隊が続いた。

＊食糧難で芋・麦・南瓜を混ぜたご飯、雑炊等が主食で、子供たちの中には弁当を持って行く事が出来ない子供もいた。
＊学校の空き地を利用して芋を植え、自分たちの大・小便を肥料にして育て、皆で食糧の足しにした。
＊大型の台風が来て、高波が海岸近くの芋畑を直撃、すぐに掘り出さないと食料に使えなくなるので、授業を打ち切り子供たち全員で芋ほり作業を手伝った。
＊都会に住んでいた人たちは戦火を逃れ、私達の町にも多くの人たちが親戚を頼り、やって来た、空き家は少ないので、牛舎・豚舎・鶏小屋等屋根があればどこにでも住んだが、戦後復興が進むと元の住居に戻って行った（学校は１クラス 50 人以上のすし詰め状態だった）。
＊兵隊帰りの先生の中には、云うことを聞かない子供に素手のビンタだけでなく、スリッパやベルトを使った躾もあった。
＊衛生環境が悪く、ノミ・シラミが発生、学校でＤＤＴを頭から振りかけられた。
＊叔父が中学に通う時、駅でチンピラに会い、弁当を取られた。チンピラは弁当を半分食べると「残りはおまえの分だ」と返してよこした。

以上、昔の思い出を羅列しましたが、語り部の材料になる事が有れば幸いです。

「負けてたまるか」は、母の口癖（くちぐせ）　　森町遺族会　太田和子

父は、昭和 18 年 10 月、中国広東省で戦死した。多くの戦死者がそうであった様に、英霊といわれた白木の箱には遺骨は無く、軍隊手帳だけが入っていた。私 4 歳、妹 2 歳、片麻痺の祖父、リウマチを患い足の不自由な母が残された。

「骨が無いのだから、中国のどこかにきっと生きている、探しに行きたい」「私が大きくなったら、きっと探してくるから」が母娘の会話であった。

戦争がどんなものかも知らず、ましてや戦地の凄惨な映像など目にすることも無かった時代であった。

母はある時、妹を背負い、私の手を引いて、大雨後の濁流の太田川の淵に立った事があった。「死ねば父さんのところに行ける」とよくつぶやいていた。突然、妹が大泣きをした。母が私の手を強く握りしめた。私は母の手を、力いっぱい、後に引いた。「いやだ、いやだ、だめ、だめ」と、桜の木の下で暗く

なるまで、3 人で大泣きして家に戻った。

母はその後、「負けてたまるか」が、口癖になった。半身麻痺の祖父と幼い妹は私が世話をした。母は雇ってくれる仕事があれば何でもやった。母の寝姿を見たことがない、優しいけれど厳しい母であった。「負けてたまるか」は、私の体にしみついている。

過酷な時代を生きた母は、59 歳で脳出血で急逝し、父のもとに旅立った。

私は、平成 10 年の夏、日本遺族会の「中国慰霊友好親善訪問団」の一員として、中国を訪問する機会を得た。母が亡くなった年と同じ 59 歳の時であった。その時の団長が現在の日本遺族会会長の水落敏栄氏であった。

北京、長沙、南昌と、中国各地を慰霊巡拝し、長江の辺りで小石を三つ拾った。一つは母の眠る墓地に、一つは仏壇に、一つはお守りとして、　帰路、北京の雑踏の中でふと視線を感じた。長身の父がそこに立っているような気がした。父はこの中国に居る、父の魂は確実に中国に居る、と思った。「必ず、また来るからね」と、心の中でつぶやいた。

私は今、82 歳。家族に恵まれ、幸せに暮らしている。戦争を知らない若者達が、未来永劫幸せに暮らしていけるよう、戦争のない、戦争をしない、平和な国であることを祈るばかりである。

私の比島慰霊巡拝について　　森町遺族会　松尾　要

私の兄は、昭和 19 年 1 月 10 日に出征し、昭和 20 年 5 月 30 日フィリピン・ルソン島で戦死したとの公報が父の下に届けられた。出征した兄からの連絡は、広島で部隊が編成され、フィリピン・ミンダナオ島に渡り初年兵教育を終えた後、幹部候補試験に合格し、マニラ近くのトンコマンガという場所で幹部教育を受けているとの手紙が最後だった。兄の戦死から 3 か月後に終戦となり、多くの兵士が復員となる中で、私達家族は兄の戦死が信じられなく「もしや兄も生きて帰ってくるのではないか…。」と帰郷を祈る日々であった。

長男の戦死で二男の私が家業を継ぐことになり、この 90 歳まで農業一筋に生きてきた。22 歳で戦死した兄の終焉の地を一度訪ねてみたい気持ちで、平成 3 年の厚生労働省の遺骨収集に参加された森町の知人に、兄の終焉地を説明して情報の収集をお願いした。後日、知人から「偶然兄の戦友の古川さんに会うことができた」との連絡を受けて、早速広島県に在住の古川義信さんと連絡を取り、翌年から連続して 4 年間、古川さんと一緒に兄の終焉地のヤンビランとボネに慰霊巡拝を行った。

古川さんの話によると、兄たちは昭和 19 年暮れにルソン島北部のサリナスに集結し、「戦車撃滅隊」として敵戦車を撃破する訓練を夜間ジャングルの中で行っていた。昭和 20 年 5 月 28 日に米軍が北上して来るとの情報を得て、ヤンビランとボネに布陣して敵の北上を待っていたところ、5 月 30 日敵戦車を発見し、戦車撃滅隊の二人が敵戦車に突入し爆破したことから、米軍は一旦退却したが直ちに飛行部隊をもって反撃し、石油缶や焼夷弾を投下し、日本軍のいた山全体を焼燬(しょうき)し日本兵を殺害。兄はこの地で戦死した。地元の比島人の話では死体を山沿いの川に投げ捨てたとのことだった。

2 回目の慰霊巡拝の時だった。ボネに着くと現地住民十数人が集まって何か騒がしくしていた。話を聞くと「1 週間前から毎夜 8 時頃この前の道路を軍服姿の日本兵が行き来して気持ちが悪いので何とかしてほしい」とのことだった。私はとっさに兄たちの霊ではないかと思い、一緒に巡拝していた僧侶にお願いして慰霊碑の前で「霊よ、鎮まれ…」という経を唱えてもらった。その後もボネに 2 度巡拝したが霊の話は出なかった。「霊魂不滅」ということが良く分かった。

なお、古川義信さんは、米軍の攻撃の時マラリア病を発症し、ジャングルに残留していたため戦死を免れ、橋の下に隠れていたところを現地人に助けられ終戦で復員したとのことであった。そして戦後、日本兵終焉の地に自費で戦車撃滅隊英霊追悼碑と慰霊巡拝者が宿泊できる施設（チルドレンズ・パーク）を建て、英霊の追悼と慰霊巡拝者の現地奉仕に尽力した方だった。

編集後記

各市町遺族会会員の皆様には、戦没者の家族として体験し、また、母親等から伝え聞いた苦労や戦争の悲惨さ、平和への思いを寄稿いただくようお願い申し上げたところ、多数お寄せいただき、冊子に取りまとめることが出来ました。改めて感謝申し上げます。

編纂に当たっては、語り部資料編集委員会で校正等に努めましたが、至らぬ点もあろうかと存じます。ご容赦をお願いいたします。

語り部資料編集委員会委員長　大石　功
委　員　横山俊英
勝又壽治
佐野義晴
久保田文雄
竹内　治

語り継ぐ思い
～戦没者遺族として～

令和４年２月発行

編集兼発行所
一般財団法人　静岡県遺族会
静岡市柚木 336
電話（054）261-7796

印刷所　株式会社スズコウ印刷